

# Asia Center News

アジアセンターニュース

1998 No. 9

国際交流基金アジアセンター  
The Japan Foundation Asia Center





表紙作品紹介

崔 正化(チェ・ジョンホア)作

“Visions of Happiness for 0.5 sec”(1995年)

1961年ソウル生まれ。引益大学にて西洋画を専攻する。均質化され、人工化した物が溢れる近代社会に凝り固まってしまった現代人を痛烈に批判する

@君が探し求めている幸福は、ぼくの脂ぎった皮膚の中じゃなくて、君の心の中にあるんだよ。心は君の内側にも外側にもある。君はぼくの皮膚を見ながら幸福を祈るのかい?

\$いゝねえ。ぼくみたいな傑作、脂肪だらけの傑作に話しかけてくれるなんて。それは君が不安だからかい? \$ (止めて欲しい? じゃあ、止めるよ。過剰な価値をつけるのを止めて欲しいのかい?) 君、ぼく、ぼくたち? 思考がなければ人生は自由になるんだよ。

@なに言ってやがる! 知ってるか? 君が作っているゴミ屑はそもそもエコ・システムには存在しないんだ。あのいまましいビニールは製品、商品のシステムの中にしかない。どんな生き物も死ぬ前にはゴミになるのが普通なんだ。けど君は、決して土に帰らないゴミを作っているんだよ。

君は、「形あるもの全て、最後にはゴミ屑になる」と言うてるんだね。でも最初からゴミのものもあるよ。何だと思う? (ゴミ袋はゴミとして捨てられるために生まれ、捨てられる。ビニールのひもは自分をほどこくこともできず、腐ることもない。)

@つまり、ゴミっていうのは、ある意味で、腐らない媒体ってことだね。商品は媒体だ。ゴミそうかい? (ハード過ぎる。会話終了)

\$うっちゃっておけ! 今のところ、うまくいってるんだから!  
(崔 正化)

Contents

目次

新世代の韓国文学	1	アジア理解講座	
対談 人々と共に歩む文学を目指したい シン・ギョンスク×島田 雅彦	2	社会は家族の鏡 瀬地山 角	15
日本訪問を終えて ~世界文学としての韓国文学のために パン・ミンホ	4	助成事業報告 アジア太平洋地域における ヒューマン・セキュリティ	18
言葉の岸 細見 和之	5	武者小路 公秀 アジアの文化と人権教育	20
日本語で読める新世代の韓国文学	7	金 東勲	
追悼: 金 綺泳監督の思い出とまだ見ぬ作品 佐藤 忠男	8	インドネシア注目の新人作家に聞く 稲見 和己	22
モンゴル映画祭		コラム: ジャカルタ発	
モンゴルでばかっこいゝ監督は必要ない B・ソムフー、D・バトルガ	11	経済危機で伝染病、ストレス病も 稲見 和己	24
プロパガンダとして始まったモンゴルの映画 フフバートル	14	インフォメーション	25

# 新世代の韓国文学

激動の八〇年代を経て、文民政権の下で民主化がすすむ今日の韓国では、社会の変化に対応して文学にも変化が起きている。かつてのように政治・社会的メッセージを強く出した文学が後退して、都市に住む人間の孤独など個人の内面を扱った文学が現れ、読者の支持を得ているのである。アジアセンターでは、第七回アジア作家講演会シリーズとして、そんな韓国の新世代作家の代表シン・ギョンスク氏と、新進評論家のパン・ミンホ氏をお招きして、一九九八年二月に福岡、大阪、東京で講演会を行った。本誌では、大阪で行われたシン・ギョンスク氏と作家島田雅彦氏の対談の模様と、大阪で対談を行ったパン・ミンホ氏、細見和之氏からの寄稿を紹介する。

「離れ部屋」(抜粋) シン・ギョンスク

従姉妹とわたしは、外泊が許される日が来ても行く所がない。職業訓練院の塀の外の道もぜんぜん知らない。行く所がない訓練生が、運動場でバレーボールをする。従姉妹とわたしもその中に混じって、バレーボールを追いかける。疲れた従姉妹とわたしは職業訓練院の中の共同洗面所で、服を脱いで水浴びをする。お互いに背中を「しじこ」すってあげて。他の日には洗面する時間も決められているが、人々が抜け出して行って、余裕があつて気楽だ。水浴びを終えた従姉妹は、顔にクリームをたくさん塗ったまま、寄宿舎に覆そへって叔母さんに手紙を書く。わたしはその横の板の間に寝転んで、天井を見上げ、足でいたすらをしている。わたしの足はしきりに手紙を書く従姉妹にちよっかいをだす。煩わしくなつた従姉妹がわたしにも手紙を書けと言つう。わたしは体をまうすぐにして、手紙を書くと従姉妹の耳にささやく。「わたしは手紙じゃなくて別な文章を書くの」「従姉妹は便せんにボールペンを付けたまま、わたしをじじこして尋ねる。

「何の文章のじじこ?」  
十六のわたし、まだ誰にも一度も言ったことのない秘密を、従姉妹の耳にささやく。

「詩か小説みたいなものじじこ?」

従姉妹の瞳がまんまるになる。

「じゃあ、作家になつてじじこじじこ?」

十六のわたし、寄宿舎の板の間で、従姉妹がわたしの言葉を黙殺してしまつたのではないかと思つて、一生懸命にもつと言つう。もうずっと前からわたしが望んできた仕事は、そういうものを書く仕事で他のことはしたくない。従姉妹は便せんの上に付けていたボールペンをあここに当てる。首をかしげる。

「そういう人たちは、違つたふうに生まれるみたいだけど?」

わたしは従姉妹が、だからあなたは作家にはなれないよ、と言つんじやないかと思つて、いらいらしてもう少し言つう。  
「違つたふうに生まれるんじやなくて、違つたふうに見えるんだよ」

従姉妹は何も言わずに、しばらく考えにふける。十六のわたし、従姉妹がわたしの言葉を聞きとれないんじやないかと思つて、上気した顔で、従姉妹にびつたりとくつく。

「あなたが鳥の写真を撮る人になるのとおなじじや?」  
いとこは便せんに折りたたんで、私物箱に入れ、寄宿舎の天井を見て、まっすぐに横たわっている十六歳のわたし。

わたしの横に並んで横になる。天井に向かって、重なっている従姉妹の足首が滑らかだ。

「何を書くの?」

十六のわたしの目の前にしばらく、井戸の底に沈んでいる鉄の熊手を通りすぎていく。

「それはまだ、わたしにも分からない。」

その日の従姉妹はわたしにたとえようも無くやさしい。わたしはそのやさしさに引かれて、わたしの足の裏に突きささつた鉄の熊手の話を出す。足の裏まで見せてあげる。

「これ見て。すっかり直つたのに、長いこと歩くと、筋肉がひびひれるように痛。」

従姉妹はわたしの足の裏を覗きこんで、聞き返す。「それと、ものを書くことと、何の関係があるの?」

十六のわたし、もう言葉が詰まってしまう。どう言つたらいいのか。心の中に純潔な何かを置いておかなければ、もう一度わたしの足の裏に鉄の熊手を突き刺してしまつたらどう?と、言つてやつたらいいのか。とにかく、とわたしは言つう。

「それだけが、わたしを守つてくれる」

『離れ部屋』文学トーン社、一九九五年(より) 翻訳・和田とも美

# 人々と共に歩む文学を目指したい

シン・ギョンスタ 申京淑) × 島田雅彦

書くことが私を救ってくれた

島田 シン・ギョンスクさんと初めてお会いしたのは二年前、松江で開かれた日韓文学シンポジウムにおいてでした。その折りにシン・ギョンスクさんの口調が他の韓国の詩人、小説家、評論家の方々と違っているのに強い印象を受けました。というのは、韓国の文学者は常に時代状況というのを背負っていて、その人が青春時代を送った時期はどどういう政権で、実際にどどういう民主化運動に係わったかというようなことが常に背景にある。その語り口は政治的な無風状態を五十年も生きている日本からすると違和感を覚えるようなものでした。ところがシン・ギョンスクさんの語り口は、物静かに誰かに向かって語りかけるような調子だったので。

先日イタリアのトリノでシン・ギョンスクさんに並ぶ韓国のベストセラー作家の方と一緒にする機会がありました。その時も、彼が政治的な経験や、何故に書くかといった大問題はわり報告されていたので、私がたまには個人的な話を聞きたいと洩らしますと、なかなかそういうことは話せないのだとお答えになりました。なぜかと聞くと、それを君に説明しても難しいと言われました。そんなわけですから、今日は是非シン・ギョンスクさんの創作の周辺をその肉声において聞かせていただきたいと思えます。

さて、シン・ギョンスクさんは最初に「自分が小説家として書いていく」と決意されたプロセスを、離れ部屋という小説に書いていらいしゃいますね。これを読んで僕は自分が暴力がアートかという究極の選択を迫られていた局面を思い出しました。そういうえば僕も十代の頃に書きたいと思う瞬間があつて、日記のようなものから始めたのです。文章を書かなければ自分を傷つけてしまうので

はないかという恐怖もありました。

シン 私も同じようにただ書きたいという気持ちから、手紙や日記から始めました。それが小説になったのは女子校時代の恩師のおかげです。事情があつて五日ぐらい学校を休んだら、先生が反省文を書いていらいしゃいと言いました。私は何が悪かったのかよくわからなかったで、反省の代わりに自分の気持ちを書いて提出しました。「私は本を読みたいのに、ここに来るとタイプやそるばんをしなければいけない。だから学校に来たくありません。本を読ませてくれるなら学校に来ます」と。そしたら先

生が「じゃあ学校に来て、本を読みなさい」と言ってきたのです。そして小説家になつたらどうですか」とおっしゃいました。それまで文章というのが、詩なのか小説なのか決まらなかつたんですが、そのとき小説を書くことに決心したのです。

島田 あなたのほうから先生を脅迫し、小説家になりなさいと言わせたような感じもしますけれども、ではもし文章を書かずにいたら、今ごろ何をやっていただいでしょうか。シン 考えてみたこともありません。小説家にならうと決めたのが十五歳の時でしたから。それから小説家にならなさいいけないと思つてすぐに創作活動を始めてしまいました。小説は私の一部、存在の基盤で、一度も離れて生きたことがありません。書き始めたきっかけは、自分がこの世で何でもない存在であるという不安からでした。文章を書きながら、自分が何でもない存在であるという思いから抜け出すことができたのです。

島田 シン・ギョンスクさんが書かれているのは、その語り手の生活と意見であると同時に、家族とのつながり、深いノスタルジーを抱いている場所についての作品が多いように思います。あまり恋人とか、そういう対象が素材になることはないという指摘があるようですが。

シン 私は田舎で生まれましたが、十五歳の時に勉強のために都会に出てきて以来、ずっと家族と離れて暮らしてきました。そのために、故郷に対して憧憬、郷愁を抱くようになりました。幼い頃過ごした農村の伝統的な生活が写真のようにぼんやりと記憶に残っていて、今でもそこへ行けばここに何があつた、この道を歩いたことがある、ここで何をして遊んだ、そして隣には誰がいた、というところが映像として思い出されます。もちろん横にいた人というのは家族です。多分、家族と一緒に暮らすことができたので、かえつて会いたいと思つて気持ちが強くなったのでしよう。もしずっと一緒に暮らしたらこんな気持ちは起らなかつたと思えます。

家族に対するこのように気持ちは現代社会には馴染まない感情でしよう。実際には農村で暮らしているよりもずっと長いと都市で暮らして来ました。ですから小説を書いていると、たかさんの思い出が文章になつて迫ってくるのです。失つてしまったものをもう二度再現させるために



島田 雅彦  
1961年神奈川県生まれ。東京外国語大学ロシア語科卒。大学在学中に書いた「優しいサヨクのための嬉遊曲」が芥川賞候補作となり文壇デビュー。1984年「夢遊王国のための音楽」で第6回野間文芸新人賞を受賞。1985年俳優として舞台上に立ち、1992年には自作「ルナ」を演出。その他の作品には「彼岸先生」「浮く女沈む男」エッセイ集「認識マシーンへのレクイエム」「偽作家のリアルライフ」などがある。

創作活動を始めたようなものです。もちろんです。また農村に行くと暮らすことはできないということにはわかってはいます。既に私は都市の人間になつてしまいましたが、生まれたままに生きられるように

島田 最近書かれたジャガイモを食べる人々という短編の中では、父親をはじめさまざまな血縁者たち、それから失われてしまった農村の生活を彩る細部が非常に生き生きと書かれていますね。しかし、この作品が書かれた一九九七年といえば、既に農村は消滅し、ここに描かれているような世界は失われていた時です。それはあなたの作品を読む読者にとっても同じことですね。とすると、失われたものへの哀惜というのは、シン・ギョンスクさん個人のものであるだけでなく、共感する人たちがたくさんいるということでしょうか。

シン そうとも言えます。しかし私は農村にあつたものを回想するだけではありません。それとともに人間の関係を語っています。私たちが失つてしまった関係、人間が死ぬということ、愛情や全てを一度に失つてしまうこと、そして次第に人工化していく何かに対する抵抗感も表現しようとしています。

私の作品は韓国の若い女性がよく読んでくれていて、高校生から三十代前半の女性からファンレターが来ます。現在韓国で二十代から三十代にさしかかっている女性は、アイデンティティーの問題を抱えています。例えば、十分に専門的な教育を受けたのに仕事がないとか、結婚しても結婚生活に疑いを持つとか。そういった女性が本をたくさん読むようになりました。

八十年代までは、文学が国や社会の状況、理念の問題に言及せずにいることはできませんでした。小説で人間の心理、個人の孤独、現代生活における人と人との断絶などが扱われることはほとんどありませんでした。その隙間を、私が埋めたのだと思っています。今韓国は二つの層に分かれています。一つは個人生活に重点を置く層。もう一つは、社会に出て自分のアイデンティティーを確立したいという層。私の作品はその二つの層にまたがっているのだと思います。



シン・ギョンスク(申京淑)  
1963年全羅北道生まれ、ソウル芸術専門学校文芸創作科卒。1985年『文芸中央』新人文芸賞に中編『冬の寓話』が当選し、登壇したが、80年代にはそれほど注目される作家ではなかった。『文学と社会』1992年夏号に短編『オルガンのあつたところ』を発表して一躍新鋭として注目された。この短編で1993年韓国日報文学賞を受賞する一方、同短編を収めた同一タイトルの創作集が短編集としては珍しくベストセラーになり、彼女は芸術性と大衆性を兼ね備えた、実に稀な作家となった。

私は、文学が社会を変える力を持っているとは思っていません。ただ人々と一緒に共有しながら進むものだと思います。相手と情緒を共有できる文学、それが私の目標です。人間の存在が持っている死や愛、それから意思疎通ができないこと。それが私がこれから扱っていくことと、思っているテーマです。できれば私が使う言葉によって、人々が本能どおりに暮らせるようにしたいと思っています。自分のしたいように、生まれたままに。今私はソウルに住んでいます。将来は田舎でもない都市でもない、いわゆる郊外に暮らしたいと思っています。

島田 私は農村で暮らしたことはありませんが、本当に基本的なものというのは農村であることが都市であることが共有されているのでしよう。言葉には脳の中で作られたリアリティに終始する言葉と、肉体の感覚と密接に結びついているテクニカルな言葉があると思うのですが、都市に暮らしていても郊外に暮らしていても、そこに生

きている人間の本能とか感覚というもののはそれほど変わらないわけですね。しかし、確かに都市には虚飾性がありますから、そこを離れて郊外に行くともっと本能や感覚に寄り添った現実が現れてくるのかもかもしれませんね。

シン・ギョンスクさんよりも若い世代には、コンピュータテクノロジーを過剰に意識して、現代文学の実験的なことをやること自体に興味を見出しているような作家が現れていると聞きました。シン・ギョンスクさんは、いわばそういう人たちにくみしない立場にあると思うんですが、二つ二つ新世代の文学についてどう思われますか。

シン 私は三十代ですが、二十代にまた二つの作家群が形成されていて、活発に活動しています。あつちやぶつちに大部分が都会的な作風を持ち、コンピュータによる創作活動を行っています。そこに、新世代と既成世代の作家の間の断絶という問題が起きています。

一方では、新しい技法というのは突然生じるものではなく、伝統との響き合いの中で生じるものだと、新世代を非難する人もいます。もう一方では、新しく登場した世代の作家を擁護する人たちもいます。私はそのどちらにも属さない者として、両方の立場の人たちから質問を受けるので困っています。私のような作風を持った者は、新しい世代と古い世代をつなげる役割を果たしているのだと思います。コンピュータ世代の作家が書いた文章は、年配の人たちには何のことを書いているのか解らなくてとても受け入れられない。言語というのはお互いに疎通しようとして書くものなのに、新世代の人たちが書く文章はむしろ人と人との関係を絶つものだと言つ人もいます。それには私も同感です。

でも今は過渡期であつて、その過程を経て、パソコン文化の洗礼を受けた作家の中に人間の内面と社会生活をうまく繋げることのできる作家が登場するだろうと期待しています。なぜなら文学というのは、いくら個人的な話をしていても時代はいつも動いていますから、それを取り出して焦点を当てるといつかだと思つています。その時代の動き全体を抱きとめるような、そういう作家が現れるだろうと思っています。

# 日本訪問を終えて

## 世界文学としての韓国文学のために

ハン・ミンホ(方民昊) (文芸評論家)

左から2番目ハン・ミンホ氏、  
一番右 細見和之氏

福岡から日本に入国し、大阪、京都を経て東京に滞在、そして韓国に帰国してからすでにひと月以上が過ぎた。帰国後真っ先にしなければならなかったのは、ある季刊文芸誌から依頼されていた「金允植(キムユンシク)論」を書き上げることであった。締め切り間際に渡日してしまつたため、編集者を変えて大変に困惑させたという事情がある。金允植とは、韓国における近代文学研究の礎を築き、評論家としても今なお第一線で活躍する文学者である。彼の業績は膨大かつ精密で、後進の研究者はそれをどう乗り越えればよいか途方に暮れてしまう。その彼について、数多い指導学生の一人で新進の評論家にすぎない私が論じるなど、身の程知らずと言われても仕方ないこと、簡単には手のつけられない仕事であった。依頼は何ヶ月も前に受けていたが、実は逃げるように渡日してしまつたのだ。しかし、日本滞在の経験は私にその困難な仕事を実行できるよう導いてくれた。国際交流基金の招きという、またとない機会を得た一九九八年の新春に金允植について書くことになったのは、偶然ではあるが実に象徴的な出来事であった。

金允植から遡り、一九五〇、六〇年代の詩人金洙暎、一九三〇年代の小説家である李箱を経てさらに廉想渉、李光洙、李人植に至るまで、一九一〇年代以来多くの韓国の文学者が日本に滞在・留学した経験がある。彼らは、日本体験を媒介にして韓国の近代と近代文学についての独特な思考方式を形成してきた。金允植は幼少期に日本語教育を受け、さらに国文学の研究者として自ら日本語教育の道を選択した。金允植の国文学の研究手法には、留学時代に会得した日本の近代文学の研究手法を手本にしているのではないかと思われる面が多い。それは韓国の研究者の間で静かに問題視されている。私は今回の日本体験により、ただ批判するのではなく、なぜ金允植がそうしなければならなかったのかを考えるようになった。

私はこれまで日本語を学んだことがないし、先輩文学者である彼らの日本体験に、率直に言つてあまり関心を持っていなかった。日本語教育を強制された世代ではなく、私が学んだ外国語は英語でありドイツ語だったからである。ヨーロッパの文化にも日本を通して接するしかなかった古い世代とは違い、私たちの世代は外国語を自ら選択して学び、簡単にその国の文化に直に触れることができる。従つて、私にとつてこれまで日本は多くの国の一つにすぎなかつた。しかし日本滞在の体験を通じて、韓国文学の伝統の中にどれほど日本文学の伝統が入り込んでしまつているかを痛感した。そして日本文学、あるいはさらに普遍的な範疇としての世界文学に対する韓国文学の独自性という、先輩文学者たちが一生をかけて追求してきた命題に引き付けられることになった。

日本での最後の夜、シンギョンスク氏と私は、東京外国語大学の三枝壽勝教授、それから私たちの世話をしてくれたアジアセンターの担当者と共に、品川駅前のひなびた酒屋で過ごした。その日偶然にも、私たちの泊まっていたホテルの目の前のホテルで、韓国系日本人の国会議員が自殺した。自ら徹底して日本人になろうとしたと言われ、しかし結局は悲劇的に生を終えた彼の事件についても、心を動かされないわけにはいかなかった。それは私自身がその夜深く考えざるをえなかつた事柄とも無関係ではない。

その時、三枝教授は日本で数少ない韓国文学研究者の一人として、私の批評活動についていくつかが親身な助言をして下さつた。その内容をここで一つ一つ広げて見せ

る必要はないだろうが、韓国の若い文学者としての私とその文学批評について深く考え直さざるを得ない夜だつた。それは日本の文学者との出会いについても言える。細見和之氏や島田雅彦氏との出会いは、韓国文学の批評で主題となつてきた様々な問題について、そして私自身が批評活動をする際の観点について、より根本的な反省のきっかけとなつた。日本の同世代の文学者に接することにより、現在の韓国文学の批評をする際に重要だと思われるいくつかの主題、例えば民衆のための文学であることが、日本文学ではそれほど重要ではないということを実感することができたのである。両国の文学を知る三枝教授と接して、私を含めて韓国の若手評論家とその点にあまりに関心でいたことを考えさせられた。

私は今、一九五〇、六〇年代の、たつた一人の詩人として知られる金洙暎について批評の作業を試みている。彼は一九六六年の詩を鳥瞰する散文、変わったものと変わらないものにおいて次のように語っている。「我々の若い詩が取り組んでいる民衆、あるいは民衆という概念は、あまりにも危つしい。これは世界の二環としての韓国人ではなく、井戸の底に落ち込んだ韓国人のようだ。時代錯誤の韓国人、あるいは時代錯誤のレンズを通して覗きこめる微生物的韓国人だ」。これと関連して、今回の短い日本滞在は、新しい韓国文学と、私自身の批評が持つ意味が見えてくるような新しい次元の観点、あるいは新しい秩序感覚を、私にもたらした。文学が単純に韓国的なだけでは、つまり韓国の人文科学的風土に素直に適応するだけではいけないということについて、私は今考えている。

しかし、過去の文学者の中には、日本という名の近代に近づきすぎたあまりに、あるいは近づきすぎたあまりに、自身の個性を燃やしてしまつた例もある。とすれば私自身もまた、二重の問題の前に立っているのではないか。韓国のような歴史を持つた社会の中で、文学は一体どのような世界文学としての普遍的な水準を獲得することができるのか。あるいはその文学はどのような世界文学の中で自己を識別することができるのだろうか、という問題の前に。

(翻訳協力: 和田とも美)

無等

山

絶望の山、

頭を剃りあげてしまった、

禿山、裸の山、怒りの山、愛の山、沈黙の山、

喊声の山、証人の山、死の山、復活の山、永遠に生きる山、

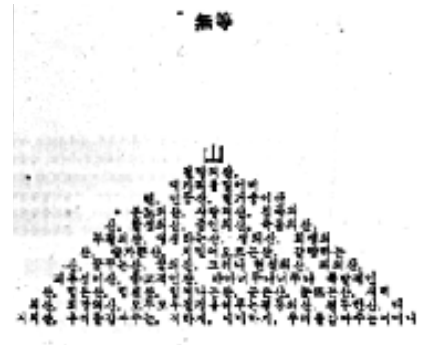
生の山、犠牲の山、喘ぐ山、湧きあがる山、渴望する山、夢見る山、夢の山、

しかし、現実の山、血の山、血まみれの山、宗教的な山、あああまりにあまりに 爆発的な山、

苦勞する山、力強い山、起き上がる山、目覚めた山、目を覚ましつつある山、夜明けの山、希望の山、

すべてすべて絶頂をなす平等の山、平等な山、大地の山、われわれを包んでくれる、激しく、豊かに、われわれを包んでくれる母

(翻訳:和田とも美)



黄芝雨「無等」  
写真提供:民音社

# 言葉の岸

細見 和之 (大阪府立大学講師)

韓国からやって来た

作家のシンギョンスクさん。

はじめて会った彼女と

掘りこたつ式のテーブルに足を引っかいて

ぼくはたましいの話をしていた。

南禅寺の料亭で

庭にはあかるい陽がそそいでいた。

(石のひとつひとつにぐきりとした影があった)

その日は

やはり韓国からやって来た評論家のパン・ミンホさんも

ぼくの親しい友人たちも居合わせていて。

\*

いつか本で読んだ北アメリカのインディオの話が、ずっと  
ぼくの胸に残っていた。白人の入植者たちに強制移住を  
命じられたとき、彼らは列車や車を使って移住地を離れ  
ることは拒んだのだ。たましいが追いつけない、  
というのがその理由だったという。

住み慣れた土地を離れるためには、たましいの速度に

配慮しなければならぬ

ブラジルやインドをめぐる、二、三年のぼくの旅……。ぼ

くの消耗……。

ぼくのたましいはいまどこに迷いこんでいるのだろうか。

\*

シンギョンスクさんと話している

少したましいが戻ってくる感覚があった。

会話の速度

通訳を介した言葉の速度が  
たましいの速度と重なるのだろうか。

すると

ずっと以前に死んだ者たちや

ごく最近死んで行った者たち

それに旅先に残してきた自分のイメージなどが

ぼくのまわりをじりじりに寄り寄ってくるのだ。

午後一時三五分、

南禅寺の料亭、

その庭のあかるい陽さしのなか。

(相変わらず、ひとつひとつに石にはぐきりとした影が

あった)

\*

ああ、あるときはぼくは、年長の知人と行きつけの居酒屋  
で呑んでいた。

マスターが伊勢の神島出身で、

その店のカウンターにはいつも潮の香りがしていた。

(二、三泊して、釣り舟を出して という計画は繰り

返し頓挫してしましたが)

ぼくらはそこで、共通の知人の奥さんの病状を話題にし

ていたのだ。

「いよいよよろしいよ、などと、まるでよくあるテレビドラ

マのひと駒みたいだ。

(その知人とは、事情があって、ぼくらはふたりとも仲た

がいていた。

だから、そのときのぼくらの会話には、よけい苦いものが

混じっていた)

酔って帰ると

留守番電話の赤いランプが点滅していた。

吹き込まれていたのは通夜と告別式の案内だった。

「いよいよよ、などと、言っていた

そのいよいよよ、

ぼくらのぼくがげんこの背中を

みごとに追い越されていた。

あの「いよいよ」の速度  
そして

ぼくらふたりをその知人と仲たがさせた  
複雑にして単純な、あの「事情」といつもの速度……。

\*

サンパウロから、サルバドールを経て、リオデジャネイロへとむかった、あの夏の旅。一六世紀にはじまる、ポルトガルの植民地支配下での、カソリックによる有無を言わせぬ布教と改宗。そして数百年後、ナチのヨーロッパをまぬがれて、リオデジャネイロにたどりついた、「ユダヤ人」たちの航跡。ぼくらは、リオデジャネイロの「タヤ学研究所」で、ポオルクソンと二つの女性の研究者から、今世紀中ごろまで活動していたイデッシュ語劇場の舞台の書き割りや台本の原資料を見せていただいたのだ。このように資料を持っているお年寄りは多いんですが、みんな大事にしまっていたのでしよう、なかなか提供してもらえないのです。ボール紙に鉛筆とフクロペンで書きこまれたスクッチ、滲んだイデッシュ語のインライ文字。当時習いはじめたばかりだったイデッシュ語の文字のひびひびと音を、ぼくは、そのリオデジャネイロの研究所の一室で、たどたどしく読みあげていった。

\*

大分県由布院の、隠れキリシタンの里。そこに残るキリシタン墓地。この冬、ぼくはそこにも足を運んだ。亀の井別荘の、中谷健太郎さんの話。干柿の味のする和菓子。それにうつく、大分から五島にいたる、リスボン出身の医師アルメイダの、一六世紀の足跡を訪ねる旅。病院や孤児院をつぎつぎと設立したアルメイダ（その名を冠した、大分市のアルメイダ病院は、県下でも有数の大きな病院なのだ）。一五五六年に日本でイエズス会に入信した彼は、その後天草を中心に布教にたずさわり、故郷に帰らないまま、天草の河内浦で五八歳で没している。

\*

強制ではない「改宗」とはなんだろう。ひとつの信仰がある心のなかに強制的にはなく浸透してゆく、そこには、どんな時間が流れているのだろう。それは、長い時

間をかけて、しかし最後にはいつの間にか、ぼくらがある言語を獲得しているような具合なのだろうか。ポリグロット（多言語使用者）のある友人は、どこかの「外国」で、その言語で思考し、その言語で夢見ていることに、あるとき、ふと気づくといつのだが。あるいは、信仰が心に浸透するのではなく、むしろ心が信仰の場に入っていくのだろうか。しかし、そこにもしかるべき「時間」と「速度」はあるはずなのだ。

\*

ところで、行きつけの居酒屋で「いよいよ」といついたあの年長の知人  
それが今度は、二年後に脳梗塞で倒れたのだ。やはり、その潮の香りのするカウンターで二人で呑んだ三日後。

（釣り舟の話はこれで永久に消えた、とぼくはおもった……）

ぼくが病院に駆けつけたのは二週間後。

一命をとりとめたその知人は、いまりハヒリのさなかにある  
ある  
このころは実は伝聞で

ぼくはその後、ほとんど彼のもとを訪ねていない。

酷薄なことだ。

たぶんぼくは恐いのだ  
その知人のたましいの速度に触れるのが。

\*

同じ時間を生きていて  
ほんの少し速度をちがえる。

それだけで  
ぼくらはたくさんたましいを  
黙殺することができる。

\*

評論家のパン・ミンホさんとは、ぼくは東京で公開の対談をした。パン・ミンホさんが黄芝雨ファン・ジウ（という詩人の作品とイメージをスライドで紹介し、ぼくがそこから受ける印象を差し換えていった。「から、墓地、かすみ草、

五月、市外バス「白い」 文法から逸脱した、そんな作品のタイトルが、ぼくにはパウル・ツェランの作品のようにまっすぐに届いた。あの光州事件の惨劇から出発したという詩人。そして、孤独で寡黙な表現に傾斜しつつあるという詩人。パン・ミンホさんが読みあげるハンガルの文字面、そしてリリオンするその響きが、ぼくのたましいに浸透してゆく時間。

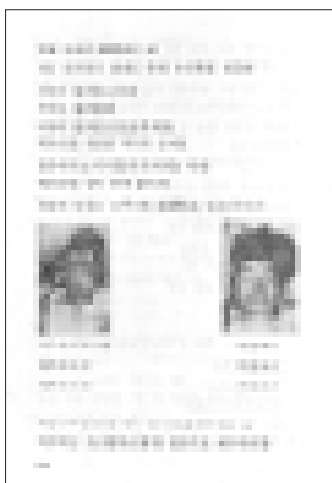
\*

あのとき対面していた、パン・ミンホさんとぼくとの距離（記念にもらったキム・クァンソクというシンガー・ソングライターのCDを、あれからぼくはずっと聴いている。この素晴らしいシンガーは三〇歳で自殺したのだという。言葉へのイデッシュ語なぼくの欲望。まるで信仰を獲得するように、ぼくはひとつの言語を習得したいのかもしれない。

\*

イデッシュ語とハンガル  
という言葉の半島

旅人のたましいの速度で  
いま文字がシャツのように洗われている海の岸辺……



黄芝雨「から、墓地、かすみ草、五月、市外バス、白い」  
写真が詩の一部として使われている。  
写真提供：文學と知性社

# 日本語で読める

## 新世代の韓国文学

新しい世代の韓国文学で、日本語に翻訳されて出版されているものはまだ少ない上、日本で出版されているものが、必ずしも韓国で評価されているものとは限らないという事情がある。本ページでは、韓国で評価を得ている作家とその作品を紹介するが、韓国で高い評価を得ている作家でも翻訳されるものは短編が多く、長編小説は非常に少ないのが現状である。

ほんやくの会編訳『冬の幻 韓国女性作家作品集』朝日カルチャーセンター図書出版室、1995  
購入に関する問い合わせは東京外国語大学三枝研究室内ほんやくの会  
(FAX:03-5974-3153)



に人気がある。

「アユ釣り通信」(すばる 8月号)『集英社、1998(7予定)』

チャン・ジョンイル (蔣 正一)

一九六二年慶尚北道生まれ。詩人でもあり戯曲も書く。才気溢れる作風で都会的な感受性を提示する一方で、八〇年代後半より斬新で大胆な技法の試みによつて韓国社会に対する批判的な作品を発表。詩集に『ハンバーグに対する瞑想』(1987)、小説に『それは誰も知らない』(1989)などがある。

『アダムが目覚めるとき』新潮社、1992

ウン・ヒギョン  
一九六〇年全羅北道生まれ。登場してまだ日が浅いが、旺盛な活躍ぶりで大形新人とも呼ばれている。一風変わった発想や女性作家に珍しい大胆さが多いの読者の獲得する一方、いささか評論家とまでわけている。

『鳥の贈り物』(抄訳)『アジア文学』文化社、1998

ヤン・ギジャ(梁 貴子)  
一九五五年全州生まれ。連作小説『遠美洞』(ウォンミドン)の人々(1986)など、変わりつつある韓国の都市に住む人々の生活を生き生きと描き出した作品を発表している。

『ソウルスケッチブック』本犀社、1997

壬ユン(崔 允)

一九五三年ソウル生まれ。フランスで仏文を専攻した後、西江大学の仏文科で教鞭をとっている。一九八八年に光州事件を扱った『あそこに音もなくひとひらの花びらが散る』で注目を浴びる。南北分断で分かれた家族を扱った『父の監視』や八〇年代の運動を扱った『灰色の雪だるま』など、時局性のある題材が目立つが、いずれも現代人の悲劇を内省的な視点から書くところに特色がある。最近『冬、アトランティス』という大作を出した。

「ハチ(はいない)冬の幻 韓国女性作家作品集」

オ・ジョンヒ(吳 貞姫)

一九四七年ソウル生まれ。登場人物の設定が独特で、グロテスクな描写が随所にみられるのが特徴。近代化する社会における主人公の葛藤というテーマが一貫してみられる。

『影踏み』(冬の幻 韓国女性作家作品集)『金色の鯉の夢』段々社発行、星雲社発売、1997

洪 世和

一九四七年ソウル生まれ。ソウル大学の工学部で学び貿易会社に就職までした経歴を持つが、大学時代から関わっていた政治運動により海外勤務先のパリから帰国できなくなり、亡命生活を余儀なくされている。作家とは言えないが、左記の自伝的手記はベストセラーになり版を重ねた。

『コレアンドライバーはパリで眠らない』みすず書房、1997

(取材協力)財団法人韓文化交流基金、三枝壽勝(東京外国語大学教授)

名前の表記は、ご本人が通常使用している表記に従った。

## 新世代の韓国文学

シン・ギョンス(申 京淑)

「パドミントンをする女」(冬の幻 韓国女性作家作品集)『写真参照』  
「オルガンのあつたところ」『新韓国読本3』韓国新世代事情『社会評論社、1995』  
「冬至の日」『新韓国読本4』ソウル街へらし『社会評論社、1996』  
「或る失踪」(冬の寓話)『或る失踪』アジア女性作家シリーズ第5巻『紀伊国屋書店、1997』  
「集まってくる灯の光」(『早稲田文学』1998 1月号)『早稲田文学会、1998』  
「じやがいもを食べる人たち」『アジア文学第3号』アジア文化社、1998  
「ワトリを抱いた少女についての短い物語」『新韓国読本7』韓国新世代事情『社会評論社、1998』  
「聖原」(すばる 8月号)『集英社、1998(7予定)』  
『野原の中の高台の空き家』(同右)

コン・ジヨン(孔 枝泳)

一九六三年ソウル生まれ。シン・ギョンスク、キム・インスクと共に、六三年トリオと呼ばれる人気作家の一人。八八年に学生運動にまつわる初作短編を発表して以来、過去をひきずって現在の新しい環境になじめない人物を多く描いている。

「モスクワにはだれもいない」『新韓国読本4』ソウル街へらし『社会評論社、1996』  
「絶望を越える方法」(『新韓国読本3』韓国新世

代事情『社会評論社、1995』

「夢」(冬の幻 韓国女性作家作品集)

キム・インスク(金 仁淑)

一九六三年ソウル生まれ。八〇年代には政治社会運動を素材にして描いた作品が多かったが、九〇年代に入つて日常生活が抱える亀裂などを描き、作品世界の変化が見られる。

「あなた」(冬の幻 韓国女性作家作品集)『共にゆく道』(ガラスの番人 韓国女性作家短編集)『凱風社、1994』  
「大統領の食卓」(『笑いの三千里』白水社、1992)

コン・デヨン

一九六二年忠清南道生まれ。一九六〇年に『文学思想の新人賞』でデビュー。伝統的な古典をふまえた手法や現実と非現実、過去と現在を行き来する幻想的な手法を活用し、従来の韓国の小説の特色だった現実に密着した作風とはかなり異なる世界を提示している。その手法に応じて文章にも神経を使っていることが伺え、文学愛好家、特に作家志望の読者

『ソウルスケッチブック』本犀社、1997

追悼

# 金綺泳(キム・ギヨン)監督の

## 思い出とまだ見ぬ作品

佐藤 忠男 (映画評論家)

その作風を「魔性の美学」と呼ばれた韓国の鬼才、金綺泳(キム・ギヨン)監督が今年の二月、不慮の事故で亡くなられた。アジアセンターでは折しも今年の六月十三日、十四日に監督の『破壊』『肉体の約束』『異魚島』の三作品の上映を予定している矢先の訃報だった。仕事上はもちろん、個人的にも親しくおつきあいされていた佐藤忠男氏に、監督の思い出と作品について語っていただく。



1997年12月  
日本のファンのためにサイン会を開いた金綺泳監督

今年の二月に、韓国映画の巨匠キム・ギヨン氏が突然亡くなられた。一九五〇年代半ばから一九八〇年代はじめ頃までに大いに活躍した監督であり、韓国映画の存在が国際的に知られるようになった一九八〇年代半ば以降は第一線から退いた形になっていたが、外国にはあまり知られていなかったが、一九九六年に国際交流基金アジアセンターが東京で彼の作品の特集上映を行なって評判になったことがきっかけになって、韓国でもキム・ギヨン

の作品が全世界に知られるための旅立ちの瞬間であり、痛ましさは言わんかたない。韓国でも盛大な葬儀があり、多くの人々が悲しんだはずであるが、キム・ギヨン再評価のきっかけを作ったアジアセンターの石坂健治氏は泣いていた。フィルム・コーディネーターの佐藤久子と私も実はかなり難航したアジアセンターの特集上映の企画には深く関与し、夫妻と家族ぐるみでの交際になっていたため、ショックで呆然としてしまった。

### 医者から映画監督へ

キム・ギヨン監督の経歴と業績を簡単に紹介しよう。一九一九年、ソウル出身である。第二次世界大戦中、日本で医学生生活をしていた。食料の配給も受けられないすさまじい差別を経験し、恨みは骨髓に達しているという。ただし日本のテニスは大好きだそうである。

再評価の動きが燃え上った。彼は念願の韓国芸術院会員となり、文化勲章を受け、さらに一九九七年秋の釜山映画祭では本格的な特集回顧上映が行なわれた。そしてこれを見たヨーロッパのいくつかの映画祭のディレクターたちがそれぞれに特集上映を企画して帰ったのである。今年の二月にはその第一弾としてベルリン映画祭で特集上映があり、キム・ギヨン監督は夫人とともにそれに招かれて出発する前夜に、自宅の火災で亡くなられたのだという。夫人も一緒だった。まさにそ

の作品が全世界に知られるための旅立ちの瞬間であり、痛ましさは言わんかたない。韓国でも盛大な葬儀があり、多くの人々が悲しんだはずであるが、キム・ギヨン再評価のきっかけを作ったアジアセンターの石坂健治氏は泣いていた。フィルム・コーディネーターの佐藤久子と私も実はかなり難航したアジアセンターの特集上映の企画には深く関与し、夫妻と家族ぐるみでの交際になっていたため、ショックで呆然としてしまった。

鮮にもどり、平壤で学んでいた。そこで演劇活動に打ち込んでいたら、ロシア人からモスクワに行つて演劇を勉強したらどつかつとすめられ、どうしたものかと教師に相談したら、演劇には才能や努力の他に運も必要で、そこまでは判断できないと言われ、医学の勉強を続けるためにソウル大学の医学部に移つたのだという。朝鮮戦争が始まるまでは、危険はともなうても南北を行き来することは不可能ではなかったらしい。こうして一九五〇年にソウル大学を卒業して外科医になるが、実は学生時代も劇団を率いて活躍し、日本語に訳されたシェークスピアや西洋近代劇を読んで韓国語に訳して上演した。のちに結婚した夫人は当時の学生劇団の一員で、キム・ギヨン本人の言葉によればソウル大学いちばんの美人だった。夫人もまた、彼の演出でウエ二アの商人の主演をしたことなどが忘れ難いとおっしゃる。

こうして軍と深い結びつきが生じ、演劇仲間を集めて軍のための映画を作るといつところからいきなり映画の監督兼プロデューサーになった。助監督経験なしの自己流である。以来、原則として会社には雇われず自分の作品は自分で製作してきた。ヒット作が多かったのでそれが可能だったが、独立プロだから失敗すれば金繰りに困り、夫人が病院を経営しながら経済を支えることが多かった。近年はすつと夫人から小遣いを貰っているので彼女には頭が上がりません。

以上が私がキム氏と親しくなつてから折りにふれて聞いた思い出の断片をつなぎ合わせたもので、実際の話はあまりに面白すぎて、どこまでが本当でどこからが冗談なのか、実のところよく分らない。

日本で初めての上映

衆目の一致するところ代表作は一九六〇年の『下女』であるが、これは翌年、マニラで開

かれたアジア映画祭に出品され、フィリピン  
の批評家たちによってグランプリに選ばれた  
のに、日本からやってきたこの映画祭の創始  
者の某プロデューサーが強引に小津安二郎の  
「秋日和」にグランプリを変えさせ、これが原  
因でフィリピンはアジア映画祭を脱退したの  
だという。事の真偽は私には分らないが、キ  
ム・キヨソ氏はそういっており、日本留学時代  
の苛烈な差別の経験に次いで、だから日本人  
は嫌いだと強調する。じつはアジアセンターが  
「金洙容・金綺泳特集」を企画したとき一旦  
は快く承諾したにもかかわらず、思い起せば  
これらの日本人に対する怒りがこみあげて  
抑えきれず、少なくとも現在自分が権利を  
確保している「下女」だけは出品したくないし、  
日本にも行きたくないと、その心情を見事な  
日本語の手紙で訴えてきたのである。

「じつは他人の心情にかかわる裏話はどう  
しても憶測が入るので安易には書かないほう  
がいいのだが、国際交流にはしばしばついてま  
わることであり、とくに日韓関係ではそうであ  
る。それに故人の人柄を思うとき、どうし  
ても忘れ難いことなので、ここに書きとめて  
おきたい。

私が実行委員長だった「韓国映画祭」とい  
う催しがアジアセンターと協力していた関係  
から、私はこのキム・キヨソ氏からの手紙につ  
いて相談を受けた。そこで佐藤久子と私は韓  
国映画界における私たちの知人たち数人と  
日本における彼の弟子の李孝仁氏の協力を  
得て彼に考え直してもらおうことに全力を傾  
けた。その経過は話せば長い紆余曲折になる  
が、要するに私たちがやったことは、私たち  
がいかにキム・キヨソ作品を高く評価してお  
り、その価値を日本や広く世界に紹介する  
ことに意義を感じているかを分っていたたく  
といつくことに尽きた。もちろんアジアセンター  
のスタッフも誠意をつくした。

結果として「下女」はぎりぎり国際フォーラ

ムでの上映会に間に合ったし、来日したキム  
夫妻は上機嫌だった。本当に上機嫌だった証  
拠に、一九九七年十二月に再上映したとき  
には夫妻でまた自発的にやって来られて舞台  
あいさつだけでなく自分から言い出して日本  
のファンのためにサイン会をやってくれた。そ  
のとき夫妻を囲んでささやかな夕食会を持  
ったのが会った最後になったが、そこで巨匠は  
大いにはしゃいで得意の「女性」悪魔論をぶ  
つた。ところが新年に年賀状をいただいたら  
あのと自分はおどけて冗談を言ってみんな  
を笑わせたつもりなのに、あとで妻から叱ら  
れて憂鬱になっています、と書かれていた。私  
たちは巨匠のいたずら小僧のような表情を  
思い出してまたまた大笑いさせられたものだ  
った。同じときにアジアセンターの石坂健治氏  
のところに来た年賀状には、四十年間韓国映  
画界に閉じこもっていた自分をよくぞ世界に  
引き出してくれた、という意味の言葉があっ  
た。私たちはそれでまた涙ぐんだ。こいつは  
私的な交際について書くことはこの稿の目的  
ではなく、キム・キヨソの芸術についてこそ書  
かなければならないのだが、私としては巨匠  
の人柄の一端を知ってもらおうことが作品の理  
解のひとつのヒントになると思う。

エンターテイナーを自認

代表作「下女」は、ソウルの中産階級の家  
庭に雇われた田舎出の若いお手伝いさんが、主  
人を色仕掛けて自分の言いなりにしたあげ  
く、気に入らない家族は片端から猫いらず  
で毒殺してしまうという、身の毛もよだつミ  
ステリーである。この作品の大ヒットのあと、  
同工異曲の作品を何本も作っているが、その  
ひとつの「火女」<sup>82</sup>では同じような凄惨な手伝  
いさんがついには殺した相手を肉挽き器にか



「高麗葬」1963年

けて挽き肉にしてみよう。幸いそれは悪夢の  
幻想シーンなのだが、こんな作品が何本もあ  
ることから彼は、人間の本性は欲望にありと  
きめて、それをとことんつきつめて赤裸々に  
暴露することに熱中するある種の前衛的な  
映画作家のよつに見られ、批評家からその作  
風を「魔性の美学」と呼ばれたりもした。た  
しかに彼の作品にはある種の前衛性があり、  
既成のモラルに対する破壊性もある。しかし  
前衛的作家がとかく陥りやすい観念性や難  
解さはない。恐ろしい恐ろしい「下女」にし  
ても、まず第一に見てとれるのは、どうだ面白  
いだろつと問いかけて止まないワクワクす  
るような語り口の楽しさである。事実彼は、  
ゲイジツなどという他人事のような表情  
になり、自分の作品はまずエンターテインメン

トだと自認している。とはいえ、優れたエンタ  
ーテインメント作品が同時にきわだった芸術  
性や社会性を持つということは大いにあり得  
ることであり、そういう懐の深い作品こそが  
時代の思潮をリードする力を持つて興行的な  
ヒットも勝ち得るものだといつことはあえて  
言うまでもないであろう。女は悪魔だ、とい  
うような仮定は、儒教思想的な男尊女卑の  
傾向の強い韓国社会では、女性蔑視的な意味  
も持ちかねないと同時に、男性優位社会に対  
する攻撃的、破壊的なイメージにもなり得る。  
そのきわどいところに彼の表現は突きささっ  
ている。それは被抑圧層としての女性に対す  
る叛乱の煽動にもなり得るし、抑圧者とし  
て女性に恨まれていられるかもしれないが、金  
持ちとして貧乏人に憎まれていられるかもしれな

いという気持を持つ人々を脅かす。その強烈さは生半可なものではなく、殆んど革命的でさえもある。しかしヒロインのキャラクターがあまりにも特異なので、観る者はとりあえず、「監督は女性を憎んでいるのしょうか?」と、いつような質問をする。するとこの永遠のいたずら小僧のような巨匠は、得たりとばかり面白おかしく女性「悪魔論など」席巻して楽しんで、あとでまた最愛の奥様から、「あれは言いすぎ!」とたしなめられてしよげたりしているのだ。夫妻の臆面のない仲睦まじさを家族ぐるみで交際でさんさん見た私たちには、そんな家庭での情景が眼に浮かぶようなのである。

### 伝説の名作の数々

彼は、そんなアルフレッド・トッチョクなみのいたずらっぽいエンターテインメント作品ばかり作っていたわけではない。社会派リアリズム的な作品もあり、増村保造に似た奇矯な破壊力のあるメロドラマも作っている。ベルリンの回顧上映では韓国のタララサークと評されたそうであるが、これは熱いメロドラマ作家としての面が注目されたことであろう。



「下女」1960年

しかし宗教を一種表現主義的な観点から斬り取った「破戒」や、民俗的迷信の世界に入り込んで、異魚島などを見ると、むしろ韓国のルイス・ブノエルというべきではないか、とも思う。もちろんキム・ギヨンはキム・ギヨンのであって、トッチョクでも増村でもサークでもブノエルでもない。実のところ、これまで約三十本作った映画のうち失なわれたものが多く、プリントが現存しているかどうかよく分らない作品もあつて、容易に全体像が掴めないのである。

「下女の」前年の一九五九年に発表した十代の反抗」は、韓国の批評家李英一によれば朝鮮戦争後の荒廃した社会の陰に浮浪する少年たちの生活をリアリズムで描く「作品であり、子役時代の安聖基が主演で、サンフランシスコ映画祭で少年特別演技賞を受賞している秀作である。

「当時新人監督だった金綺泳監督が、孤児たちが集団をなして次第に犯罪の深みにはまてゆく過程を覇気あふれる問題意識で捉え、戦後社会の深刻な問題として冷静な眼で描いた作品だが、とりわけ幼い子供たちから童心が失われ、いつしか犯罪少年へと変貌してゆく姿は非常に衝撃的だった。同時に、まだ見ぬ母親に対する主人公の思慕や、孤児出身のキルナムと飲み屋の娘ガソンの間に流れる思春期の青年たちの清純な感情、そしてクソン少年(註、安聖基の役)を母親らしいチャン婦人のもとに行かせようとするキルナム(註、兄貴分の非情な青年)の最後のシーンから、金綺泳監督の持つテーマの一面を知ることができる。」(李英一「韓国映画入門」より)

と、これはブノエルのなか、ネオリアリズム時代のヴェットリオ・ネーシ力的なのか、切に見たい。

衆目の一致するところ、これらで『玄海灘

は知っている』(一九六一年)と、『高麗葬』(一九六三年)はキム監督の作品歴でピークをなすものようであるが、上映可能なプリントがあるかどうかよく分らない。韓国側での調査研究の進展を期待したい。『玄海灘は知っている』は第二次大戦中の日本軍に入隊させられた朝鮮人兵士の眼で旧日本軍を見つめたもので、『高麗葬』とともに、人間個人や集団に潜む生存本能や欲望を強い表現力で描いた代表作であると、前掲書で述べられている。『高麗葬』は日本の『檀山節考』と共通する棄老伝説にもとづくストーリーである。もともと棄老伝説というのはインドに発して中国、朝鮮を経て日本に伝わったものらしい。ただこの作品は棄老伝説だけでなく、村を占拠するならず者集団とそれに利用された巫堂(ムタン)に対して村人たちが百人以上も命を落しながら戦いぬくというドラマが加わっており、そこには李承晩政権を倒した学生革命の状況が仮託されているという。そして

「古代社会の雰囲気は満ちたセット内での撮影は、人間の死・貧困・シヤーマス・祭祀・生存闘争などを根源的な形で表す特異な効果をかもし出した(李英一・前掲書)」

と、つ。さあ、そうなる今村昌平的なのか、フリッツ・ラング的なのか。もちろん、それは別個のキム・ギヨンの世界がそこに展開されているはずだ。切に切に見たい。フィルムが残っていない。そんなに古い作品ではない。フィルムが残っていますよ!」

「破戒」を見ると撮影は鄭一成(チョン・イル)である。鄭一成はのちに林権澤(イム・グオンテク)監督と組んで落ちつきはらった秀麗な映像をたくさん作り出すが、キム・ギヨンの組んだこの作品では正に映像の魔術師であつて、変幻自在なカメラアングルやフォーカス

の変化で飽きさせない。キム・ギヨン監督はまた、子役時代の安聖基(アン・ソンギ)をはじめとして一作ごとにスターを育てたことでも知られている。スタッフ、キャストに生新はつらつたる創意を湧き起こさせるのに妙を得た天成的映画監督だったのだと思われる。疑いようもなく天才だったのである。これから世界的に広く研究がすすむだろう。

### キム・ギヨン監督作品

- 『屍の箱』、『陽山道』(1955)
- 『鳳仙花』(1956)
- 『女性前線』、『黄金列車』(1957)
- 『初雪』(1958)
- 『十代の反抗』(1959)
- 『悲しき牧歌』、『下女』(1960)
- 『玄海灘は知っている』(1961)
- 『高麗葬』(1963)
- 『アスマルト』(1964)
- 『兵士は死後も語る』(1966)
- 『女女女』(1968)
- 『美女 ミス洪』、『ソンの京歌』(1969)
- 『火女』(1971)
- 『虫女』(1972)
- 『破戒』(1974)
- 『肉体の約束』(1975)
- 『血肉愛』(1976)
- 『異魚島』(1977)
- 『殺人蝶を追う女』、『土』(1978)
- 『修道女』(1979)
- 『Kill』(1980)
- 『バグナム』(1981)
- 『火女82』、『自由の乙女』(1982)
- 『馬鹿狩り』、『肉食動物』(1984)

# モンゴル映画祭 「モンゴルでばかっころい」 監督は必要ない

60年を越える歴史を持ち、多くの優れた映画人を輩出したモンゴル映画。社会主義の終焉を経て、その内容も環境も大きく様変わりしている。1998年2月27日～3月15日、アジアセンターでは「アジア映画シリーズ」の第6回として、「モンゴル映画祭 大草原の呼び声の彼方に」を開催した。2日目のトークショーでは、B・ソムフー映画監督とD・バートルガ撮影監督がモンゴルで映画を撮ることの苦勞を語った。

司会:石坂健治 / 国際交流基金アジアセンター フィルム・コーディネーター  
海野未来雄 / モンゴル現代文化研究者  
通訳:フフバートル  
エルデニバートル

レフ・クレシヨフに師事

司会 皆さん、モンゴル映画祭へようこそ。今日は、はるばるモンゴルから監督と撮影監督をお迎えして、いろいろお話を伺いたいと思います。

お二人は今日、セブナイヤーズ・イン・チベットを見に行かれたそうですね。いかがでしたか。ソムフー アメリカの映画は俳優、技術、資金の面で非常に充実していますので、良い映画が多いですね。アメリカ映画の特徴は、本筋をしつかりと押さえていて、さらに観客の関心を引くために他の内容やユーモアもつけ加え

たりしていることです。

しかし歴史的な事実と違う部分があります。映画には事実と違う部分があります。映画というのは、まず運命というか、歴史というものをはつきりと映さないといけないと思います。しかし私たちも、社会主義時代にはイデオロギーの拘束のためにかなり歴史的な事実とはかけ離れた映画を作ったものです。

司会 お二人はどういういきさつで映画の世界に入られたのでしょうか。ソムフー とても難しい質問です。というのは自分でもよくわからないからです。もともと私は画家志望でした。幼稚園の頃、父の仕



D・バートルガ撮影監督



B・ソムフー監督

事の関係でモスクワに住んでいたために、ロシア語は達者でした。それで一九五六年にモスクワに絵の勉強をしに行く予定だったので、ところがあなたにはロシア語が達者だから、画家をやめて映画監督になりなさい」と言われまして、それで変わったわけです。私も自分の好きなことはまた後でやればいいと思うて、とにかく一応映画監督を目指すことにしました。世界的に有名なレフ・クレシヨフという方が先生でした。その時点では本当に映画を作れるかどうか分からなかったのですが、とにかく勉強するしかなくなり、そついつわけて映画監督になったのです。

バートルガ 私は小さいころから映画のカメラマンになりたいと思っていて、小学校三年のころから撮影をするようになりました。しかし私が高校を出た一九六〇年にはカメラマンになる機会はなく、でもとにかく映画の勉強をしたくて、映画技術の勉強ができる学校へ行きました。それで私の夢は実現し、映画のカメラマンになったというわけです。

司会 クレシヨフはソビエト映画のモンタージ理論を打ち立てた大変有名な方ですから、彼も、彼の授業はどんな様子だったのですか。ソムフー クレシヨフ先生は、撮影したフィルムと鉄を持ってきなさい。それだけで映画にな

るから」とおっしゃいました。二つの無関係なフィルムをつなげると、モンタージュによってそこに意味が生じる。これは映画芸術だけに可能なことだ、というのがです。とにかく先生のその話だけは覚えております。

しかしこれだけ映画を作っても、振り返ってみるとまだ勉強が足りないということがわかります。また勉強しようと思っているうちに年をとってしまいました。映画監督とは体何なんだろうというも考えていますが考えているうちに時が経ってしまいました。これもクレシウ先生の有名な話で、映画監督とはどういつものなのかというところについては、結局答えがないんだと言っています。一生かかって映画を作っても、結局この問いには答えられないそうです。

私の大学でも新しく入学した学生が、監督になるとか俳優になるとかいった希望を持ってやってきました。そこで私は彼らに、なぜ俳優あるいは監督になりたいのか、と聞くのです。すると、スクリーンに映るのがかっこいいからとか、映画を撮って観客に見せることが素晴らしいから、という答えが返って来ます。そこで私は、そんなことしか考えていないのならもう来ないでくれ、と言っています。俳優にしても監督にしても、どのようにならなければならないかを考えなければならぬのです。

映画というのは民族の文化を伝達するための媒体でもあります。モンゴルでは長年民族の文化が抑圧されてきました。宗教についても、チンギスハーンやモンゴル民族の歴史、古い文化についても自由に語ることはできませんでした。現在はその文化の復活のために、私たちは努力しております。

司会 監督志望の留学生はたくさんいらっしゃったと思うんですけども、モスクワからモンゴルに帰って来て、みんな監督になれたんですか。

ソムフー 映画を勉強してモンゴルに戻ってきた学生たちは、ほとんどが監督になりました。しかし良い映画がつくれたかどうかは別の問題です。

とにかく私は絵の勉強をやめて映画の勉強をしたわけですから、最後まで映画監督をしていかなければなりませんでした。世界の状況を見ても、作家や俳優、画家から映画監督が生まれることはよくあります。なぜかと言つと、領域が近いからです。ですから私にとって絵の勉強というのは、監督をする上で非常に役に立ちました。

バートルガ 私は、今回上映されているソムフー監督の迷いの果てに」という作品で撮影を担当し、それが卒業試験というわけで大学を卒業することができました。私たちモスクワで勉強した人たちはモンゴルに戻ってモンゴル映画製作所モンゴルキノに勤めたわけですが、一九五〇年代、六〇年代に卒業した人たちというのは、その後のモンゴルの映画を支えてきた人たちでもあります。そのことを非常に誇りに思っております。ですから、これからは若い世代を養成しなければなりません。そのためにも、最後の力を捧げているわけです。

思い通りにいかない撮影

司会 モンゴルで映画を撮る時に地方にロケに行くことがあると思うんですけども、撮影隊を組んで地方にロケに行くのはかなり大変な作業ではないですか。

バートルガ ひつと思いがあります。「迷いの果てに」を撮った時に、主人公の夫婦が白樺の木の下で会うシーンを十五回も撮り直しました。しかしこんなに苦労して撮ったフィルムも、現像の段階で機械がうまく動かなかったり、いろんな事情で結局無駄になってしまったのです。それでソムフー監督はかんな



『伴侶』 1975年  
監督 B・ソムフー

持病のため医師から出産を禁じられているナランは、世継ぎの誕生を望む義父から冷たくされ、やがて子どもを産もうと決心する。都市と地方の価値観や生活環境の違いを浮き彫りにした作品。

たことがあります。そうしたら彼らも逆にドイツの映画人をモンゴルで研修させたいと言つんです。それを聞いて非常に驚きました。モンゴルで何ができるんだ、という研修ができるんだと思つて尋ねたところ、彼らの答えは、モンゴルでは映画を作るためにどんなに苦労しているか、ドイツの映画人に知らせたいということでした。

んに怒って心臓発作を起こしてしまい、私は助監督と一緒にいるはその現場へ行ってもう一回撮り直したりしたのです。これはほんの二例で、こうした苦労というのはたくさんあります。

モンゴルでロケをする時によくあるのは、トラックやジープが草原の中で故障して動かなくなることです。機材は馬に乗せて、私たちは歩くしか無い。それも数十キロも、こういうことはよくありました。

草原地帯ではまだそうやって歩くことができますけれども、ゴビ砂漠の中で歩くのは大変なことです。一番の問題は水なんです。飲み水がなくてかなり汚い水を飲まないとけない、というところもよくあります。

ソムフー ロケだけでなく、モンゴルで映画を撮るためにはいろいろな困難があります。七〇年代に旧東ドイツの映画製作所の関係者がモンゴルに来たことがあります。そのときに私たちは、モンゴルのカメラマンや映画監督をドイツで研修させてくれるようにお願いし

私が映画監督を目指す学生に対して、監督になるのは素晴らしいとかかっこいいと思うんだらやめておいたほうがいいと言つのはどういふわけですか。案でかっこいい監督になりたいんだら外国へ行つて勉強しなさい、モンゴルではそれではできないからどういふふうに私はよく言います。

司会 もう一つお聞きしたいのは、社会主義時代の検閲のことなんですけれども、ソムフー監督も検閲でかなりカットされたことがあったと伺っています。

ソムフー 社会主義時代の検閲というのは、まず、映画製作所自体に検閲機関があって、そこでシナリオを読まれるわけです。さらにそれを日本の文部省に当たる文化省に提出します。そこでまたチェックを受けて、最終的に承認されるわけです。そうしてやっと撮影に入りますが、映画ができた後もまた同じように何度も検閲を受けます。もしそこにイデオロギーの問題が絡んだときには、政府からの検閲も入ってくる。私の経験としては、七巻(約七十分)の映画が、検閲でカット

されて最後には三巻しか残らないようなこと  
もありました。

当時私の映画をカットした人たちに町では  
ったり会うことがあります。彼らは親切に  
「ソムフーさん、今度はどんな映画を作るん  
ですか」と聞いてくれたりします。そんな  
時は、「私はもう自由な人間になったのだから  
どんな映画だって作れるよ」と皮肉っぽく答  
えています。彼らは映画を見る時、イデオロ  
ギー、思想のことが頭になかった人たちです。  
人間の苦しさとか、人間自体を見る目が無い。  
そういう人たちが私たちの芸術を管理してい  
たわけです。本当は映画というものは、官僚  
ではなくて、まず観客、庶民が見て善し悪し  
を判断しないとけない。今やちとそういう  
良い時代がやって来ましたが、残念なが  
ら私は年をとってしまいました。でも日本  
に来て、ちよと若返った気になっています。

### 草原の風が映画音楽

司会 モンゴル映画は音楽がたっぷりいたも  
のが多いんですけども、ソムフー監督の作  
品は、特に「千ターの音」など、むしろ音を  
つけまい、つけまいとする監督の意思のよう  
なものを感しました。

ソムフー 映画というものは、音楽がなくて  
もいいのです。音楽をふんだんに使う監督も  
いますが、それはやはり映像を飾るためです。  
いい音楽を使えばいい映画になると思ってい  
るのでしょう。確かに、遊牧民族は音楽と歌  
の入っている映画が好きです。そういう意味  
でインド映画などが大いに受けています。し  
かし私は必要で意味のあるところにか音楽

を使いません。私が作った映画の中では、歌が  
入っているのは二、三本だけ。歌というのはま  
ずその映画の筋、内容に合うものでないとい  
けない。私が嫌いなのは全然意味のない所に  
意味のない歌が加えられることです。モンゴ  
ルの実生活の中でも、田舎、草原へ出ていけ  
ば音楽が流れていることはないのです。草原  
の中にある音というのは、風、雨、吹雪の音、  
家畜の鳴き声など自然の音です。それを使う  
だけでも十分だと思っています。

司会 現代のモンゴル映画はお二人が映画を  
撮っていた頃とはかなり違ってきていると思  
います。最近のモンゴル映画についてどう思  
われますか。

ソムフー 九〇年代は社会主義体制から資  
本主義体制に移り変わり、社会が非常に混  
乱している時代です。西洋の模倣をする傾向  
もありますし、悲劇的な、暗い映画を作る傾  
向も出てきています。あるいは全く意  
味のないところで笑わせようとする映画を  
作るうとしてくる人もいます。

また、映画を作れば金が儲かると思ってい  
る人たちもいます。九〇年代にモンゴルで国  
内映画祭がありまして、当初多くの映画が工  
ントリーしました。それを見て私は非常に驚  
きました。というのは、以前私たちがところ  
で編集や助監督をしていた人など、素人が監  
督をやっていたからです。それは、スポンサー  
が彼らを使って金儲けをしようとしたからで  
す。ところがそれらの映画は観客が余り入ら  
なかつたために、映画祭に出品される映画の  
本数は次第に減っていきました。スポンサーた  
ちもモンゴルでは映画は金儲けにならないと  
いうことがわかって投資をしなくなつたので  
す。映画に投資したお金が回収できずに倒  
産したスポンサーもかなりあつたようです。

一方、観客のほうも減っており、以前は十  
八の県ごとに映画館があつて、更にその他に  
移動映画といつて各地の文化会館などで上映  
していましたが、そのほとんどが閉鎖  
されてしまいました。ですから映画を作るこ  
と自体、非常に費用がかかるようになりまし  
た。すると当然チケットも高くなりますので  
ますます見る人が減るといつ悪循環に陥つて  
います。どのようにしたらこの問題が解決で  
きるかといつことを私たちは真剣に考えてい  
ます。対策としてはビデオで映画を作るしか  
ないでしょう。フィルムは非常に高いし、モンゴ  
ルには外貨が少なくてから。

国の援助は、例えば子供の教育映画だつた  
ら年に一本しか支援してくれない。ドキュメ  
ンタリーに関しては若干の援助があります。  
劇映画に対しても、今年から若干の援助があ  
るといふうわさだけは聞いています。

会場質問 もしもハリウッドから仕事の依頼  
が来たら引き受けますか。

ソムフー はい、その用意はあります。モンゴ  
ルの伝説のシナリオもあつて、日本にも持ち  
かけてみたいと思っています。

以前、「マンドハイ」、「チンギスハーン」とい  
う二本の映画が、日本によつてモンゴルで製作  
された例があります。もし本場に共同で作  
ることになったら、監督も俳優も撮影も共同  
でやるのができるでしょう。

### B・ソムフー氏略歴

一九二九年モンゴル西部のホブトに生まれる。五六  
〜六六年までモスクワ映画大学監督科で学び、これま  
でに約二十作を監督している。モンゴル映画界の巨匠。  
代表作は、国境で、敵軍よ、聞け、ゾリヤ、ヒ  
ヤンガンでの戦い、80〜81、底のない湖、88、など。



『迷いの果てに』 1966年

監督 B・ソムフー  
撮影 D・バトルガ

1921年のモンゴル革命前夜。革命の理念をもたず山奥  
で孤独な抵抗を続ける純朴な男、バルトのもとにも革命の  
影響は及んでくる。

モンゴルは遊牧の国であるだけでなく、ソ連に次いで二番目に社会主義化し一九九二年までに約七十年間の社会主義体制を経験した。遊牧の国モンゴルに映画があつたのか、というようなイメージも、最近の日本では大きく変わりつつある。一九八九年末から始まったモンゴルの民主化運動をいち早く支援し経済援助を続けてきた日本では、九〇年代以降モンゴルに対する関心が高まった。一九九三年に「アジアフォーカス福岡映画祭<sup>93</sup>」でモンゴル映画特集が組まれモンゴル映画が一度に六本上映されたのに続き、今年の二月には国際交流基金アジアセンターによる「モンゴル映画祭」でモンゴル映画六十年の歴史を飾る傑作の数々が上映され、モンゴルがアジア有数の映画製作国であることが初めて海外に知らされた。

世界の映画の歴史はわずか百年にすぎないが、このうち北アジアの遊牧の国モンゴルの映画は六十数年にわたる歴史をもっている。これは、モンゴルのもう一つの顔であつた社会主義体制と深い関係がある。一九二二年のモンゴル革命は、映画のみならずモンゴル民族の近代化を数十年早めた。一九二七年に公開されたアメリカ映画『ジャズ・シンガー』を本格的なトーキー長編映画の始まりだとすれば、モンゴルのトーキー映画『モンゴルの息子』はその九年後の一九三六年に製作されている。この映画のスタッフがロシア人であつたためにモンゴル映画と認めない映画研究者もいるが、一般的にははっきとしたトーキー長編モンゴル映画の始まりと位置づけられている。モンゴル映画の歴史は同年に製作された無声ドキュメンタリー映画『メデー47周年』から始

## プロパガンダとして始まった モンゴルの映画

フフバートル（和光大学非常勤講師）

まうたばかりだつたから、無声映画の製作とほぼ同時にトーキー長編映画の時代に入ったことになる。

近代化が立ち後れたモンゴルでこの時代から映画製作が始まったのはひとえにソ連の技術指導によるものであつた。そのため、モンゴル映画はソ連が利用した映画のプロパガンダ機能を最初から果たしてきた。映像と音声からなる映画は、識字率が極端に低かつた当時のモンゴルで啓蒙教育や政治的イデオロギー宣伝の有効な武器として位置づけられ、その製作と上映などに関する一切の権限がまず人民革命党と政府の直轄下におかれるようになった。こつとしてモンゴル映画はスタート時から一九九〇年代初期の社会主義体制の崩壊まで、一党独裁政権の政治的宣伝の道具として機能し、政府の検閲を受けてきた。そのため、モンゴル唯一の映画製作所であつた国営「モンゴルキノ」が国家計画により製作してきたモンゴル映画の歴史は、旧モンゴル人民共和国が歩んできた歴史とモンゴルの社会的変化を如実に反映している。初期の芸術映画『モンゴルの息子』と『ツォグト・タイジ』が社会主義モンゴルの独立を内外にアピールしていたのをはじめ、その後のモンゴル映画の題材はモンゴル革命の理念、国境防衛と軍人、共同組合の設立など社会主義建設、近代的生活と都市化や人口の増加により変化する若者たちの精神世界など、時代とともに変化してきた。

つてきた外国映画は、終始大衆娯楽としての機能を失つていなかった。芸術映画が年間六七本といつのは人口からみれば生産過剰になりかねないが、観客にとっては決して満足のおく本数ではなく、都市部では老若男女を問わず新しい映画が封切られると映画館へ何度も足を運んだものだ。若者の間では映画のせりふが流行語となるなど、人々の精神生活に映画が与える楽しみは大きかつた。

遊牧地でも、映画は遊牧民へのイデオロギー宣伝や教育、娯楽提供のためには、社会主義国特有の芸術宣伝団体などの移動に比べ、簡素で有効な方法だつた。16ミリの小型映写機とモーターさえ持つていけば映写マン一人でも大草原の中で数十人を前に膨大なストーリーを展開することができたからだ。しかし、こつした遊牧と映画の関係も社会主義の崩壊と市場経済が進む現在のモンゴル社会では崩れつつある。数少ない観客のためにはばる機材を運んでいくことが採算上許されなくなっているからだ。

全体的にみて、映画はモンゴル社会において長期にわたり社会主義体制維持のために利用されてきたが、モンゴル社会の近代への意識変化のために重要な役割を果たしてきた。民主政治が達成され、テレビが普及しレンタルビデオが流行する中で、モンゴル社会における映画の役割や位置づけも大きく変わりつつあるが、国産映画がモンゴル社会を映す鏡であること、そして映画がもつ大衆娯楽としての機能はそれほど変わっていない。そういう意味では、市場経済の導入により草原から遠ざかつた映画が再び遊牧民の元へ戻るように期待したい。

## 社会は家族の鏡

瀬地山 角（東京大学助教授）



平成9年度第2期のアジア理解講座は、「ラーマヤナの変遷」「アジアの家族～性と世代から見る家族」「スリランカ文学を味わう」「シンガポールを知るう」「アジアのキリスト教」の5講座を実施した。そのうち「アジアの家族～性と世代から見る家族」では、家族という切り口を通じて各国を比較することによって日本も含めた東アジア社会に対する理解を深めた。その全10回の講義のうち1回目の瀬地山氏による講義を取り上げる。

### 家族 四つの分類

家族が社会から様々な影響を受けるのは「存じの通りですが、今日はその反対に社会の方も家族構造によってそのあり方を規定されているのだという話を、東アジアをフィールドに行ってみたいと思います。東アジアの話をする前に、エマニュエル・トッドという社会学者がヨーロッパの家族をモデルにして家族形態が社会の成り立ちにどのように影響を与えるかを論じた研究がありますので、簡単に触れたいと思います。トッドは親子間が自由主義的であるか権威主義的であるか、そして兄弟間が平等主義的か非平等主義的かという二つの軸によって家族形態を四つに分類しました（次頁の図参照）。前者は子供の成人後も親と同居するかどうか、後者は相続に際して兄弟間を均分に分けるかどうかで判断します。これによって分類された四つの家族形態をまず左上から説明しますと、平等主義核家族というのは兄弟間でできる限り均分相続をし、なおかつ親とは同居しないという、フランス、スイス、イペリア半島などロレン系の社会に多く見られるパターンです。

次の絶対核家族では子供が成人するとほとんど親と同居をしません。子供は成人したり、大学に入ったときには必ず別居をする。日本のように会社勤め

をしているにもかかわらず親元から通うということはありません。それから相続の時は均分原則が絶対ではなく、遺言があれば民法の規定の中で遺言が優先されます。

共同体家族では、一つの家族の中にお兄さんと弟の夫婦が両方とも親と同居していたりします。そして父親が亡くなると、兄弟間で均分相続をして分解して行きます。

直系家族はケルマン系などに見られるもので、基本的には男子のうちの一人（一般的には長男）の夫婦が結婚後も親と同居をするというものです。共同体家族と異なり、相続は均分的ではありません。

これでいくと東アジアというのはどのパターンに入るかというと、東アジアでは基本的には結婚後も含めて親とだれかが同居をすることが頻繁に行われますから、現れてくるのは共同体家族と直系家族です。そのうち朝鮮半島と日本は基本的には直系家族に属します。つまり均分原則に対してはどちらかというと無関心で、長男に非常に偏った相続をします。日本の場合にはかつては完全に嫡長子単独相続でした。朝鮮半島はそこまで極端ではないのですが、長男の取り分が明らかに多くなるという慣行を持っています。

これに対して中国以下中国といった場合には、同じ文化圏で

ある台湾、香港も含めることにします（では二組以上の夫婦が親元で暮らすということがよく行われます。親が豊かな場合には親元にみんな同居する。そして親が貧しくて土地や家がないときには、子供のところを親が泊まり歩きます。これは日本にはない慣行ですが、中国語で「輪流管飯（ルンリウグワンファン）」と呼ばれる、順番に飯の面倒を見るという意味です。要するに親の面倒を見るのは長男だけではなく、男子全体の仕事であると考えるわけで、相続も兄弟で均分に行われます。

トッドの議論の面白い点は、こうした家族の特徴によってその社会の規範がほぼ決定されると考えた点です。例えば、自由主義が生まれるのは親子間が切れている社会である。それから平等主義が強調される社会というのは、兄弟間で均分相続がされる社会だと。ですから社会の規範を、その一番のベースになる家族が決定しているのだと考えたのです。確かにいわれてみれば自由平等の国フランス、権威主義のドイツ、日本など、社会の特徴と家族のタイプが合致しています。また共産主義化が起きやすいのは、ロシア、中国、モンゴルなど共同体家族の国です。ここでは権威主義的な父が共産党の指導者として現れるわけです。ところで、ここまで「子ども」と言っていたのは全て男子のこと

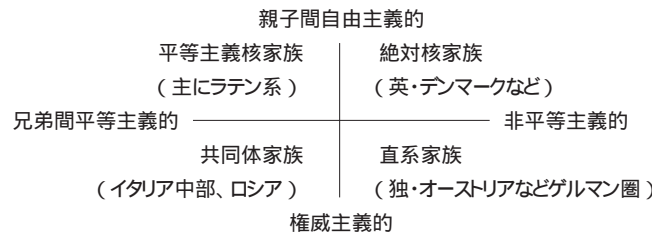


図:エマニュエル・トッドによるヨーロッパ家族の分類  
『新・ヨーロッパ大全』(藤原書店)より

で、女子は含まれていません。なぜかという点、ヨーロッパも東アジアもいわゆる父系の社会だからです。それでは父系でない社会にどのような社会があるかという点をちょっとと参考までにお話ししますと、母系社会と双系社会というのがあります。母系制の家族では結婚すると女性の両親の元で夫婦が暮らします。場合によっては婿は外から通って来るだけというところもあります。さらに双系制の社会ではどちらの親と同居するかということに關して原則がなく、条件さえ揃えばどちらもあり得ることになります。これらの社会は東南アジアに多く見られます。母系の社会では、生まれた子どもが父親が誰なのかということが父系社会ほどには問われません。どのみち母親の家で育てられるわけですから。東南アジアには姓を持っていない人も多く、系譜観念が比較的弱いと言えるでしょう。姓というのは家系を遡るのに便利ですが、自分一人で生きていくには必ずしも必要でないわけです。それに対し東アジアでは父親が誰かということとは決定的に重要です。誰がどの父親の子であるかという系譜観念を非常に強く持っている社会です。そしてこのような意識は、女性の性行動に対する厳しい規範、非嫡出子に対する差別に大きな影響を与えているといえます。

企業をとるか、  
家族をとるか

さて、トッドの議論のように家族のあり方が社会の規範に影響を及ぼしているという視点で東アジアを見てみると、一つには血縁原理の違いによって社会の違いが生まれていることが分かります。

イエ社会論というのがありますが、日本の家というのは血のつながっていない成員を同じ家族だとみなして、家族同様の扱いをしてきた。これが日本の家の一つの大きな特徴です。例えば江戸の商家でできる悪い跡取り息子が出てくると、番頭を据えて跡継ぎにしたりしたわけです。つまり家というのは血縁原則を超えて機能してきた。これが日本の明治以降の近代化で非常に機能的に作用しました。家族という概念を実際には血のつながりのない人にまでも広げてあてはめる伝統があったがゆえに、企業にもあてはめることができ、それが企業一家というような言葉を生んで行ったのです。これがイエ社会論の一つのポイントでした。

そこで血縁をどの程度重視するかに注目していくと、日本vs朝鮮半島・中国という分岐点があることが分かります。

朝鮮半島や中国には、異姓不養」という言葉があります。姓の異なる人間は養子にしないと

でも姓が同じであればいいという意味ではありません。必ず同じ父系集団の中から、しかも世代の順番を崩さないようにいここからしか養子をとらないのです。長男のところには息子がいないと、跡取りが絶えるとなれば、次男や三男のところが息子を長男の養子にするわけです。

この血縁原理の重要度の違いから、忠と孝に対する姿勢の違いが生まれてきます。忠と孝のどちらが大事か。明治の日本では天皇への忠というのが親の孝と同じなのだといふふうには忠孝を一本化していきましました。もしくはそれ以前でも、例えば戦國の武將は前線で戦っている時に親が死んだとしても、主君への忠を優先して戦い続けたわけです。孝に対して忠が優先しているのです。これは血縁原理の位置が絶対的ではなかったということと関係しています。

これが象徴的に表れたのが企業一家です。親の葬式に出られなかつたサラリーマンの話なんていうのが時々出てきますが、これはつまり家族の原理と会社の論理がぶつかった時に企業を優先させるという行動です。最近ではさすがに葬式くらいになると家族が優先されるかもしれませんが、それでも日曜の遊園地に遊びに行くくらいだと企業が優先されたりする。

これに対して、儒教の原則では孝は何事にも勝る価値です。

主君への忠こときのために孝をおろそかにするようなことは絶対あってはいけない。前線の武將が親が死んだときには、飛んで帰って喪に服します。それでは主君が困るじゃないかとお思いかもしれませんが、主君してみれば親が死んでも戦い続けるような不幸者はとても信用できなくて腐っておけないわけです。こういう文化のところでは、家族と企業がぶつかったときに企業を優先させることは少なくなります。したがって企業一家というようなイメージは比較的教育ににくいということができます。

「企業一家の日本、  
「一家企業」の中国

次に兄弟間序列に注目すると、今度は日本と朝鮮半島vs中国という分岐点ができます。英語で「きょうだい」というのはシスターとかブラザーといいますが、この言葉はそれが年上であるか年下であるかという区別を原則としては持っています。ブラザーマッドという言葉は「兄弟愛」と訳されることもありませんが、これは全然意味が違います。ブラザーマッドというのは横の対等な連帯を表す言葉ですが、日本語の「兄弟愛」というのは兄弟の面倒をみてやって、弟は兄を敬うという上下関係が含まれているのです。

兄弟間序列のある社会では年



撮影：Cho Yong-Kon(韓国)

写真提供：(財)コネスコ・アジア文化センター

年齢が非常に意識され、年齢によって序列が生じてきます。日本以上に律儀なのが韓国で、初対面の人には必ず年齢を聞いて、それに応じて敬語を選択します。本当は年齢が上の方が偉いという根拠はここにもないわけですが、私たちは何となくそう思っているわけです。イギリスのペアリングス社という大手の銀行がトレーダーの失敗が原因で経営破綻した時に、日本の新聞は「女王の銀行二八才が暴引き」など、トレーダーの年齢に言及した見出しを一齐に掲げました。ここには二八才の若造が会社を潰したという驚きが含まれているのです。これに対してイギリスの新聞ではトレーダーの学生時代の数学の成績が悪かったことなどに言及しているものが多く、年齢の話は余り出てきませんでした。また、アメリカでは履歴書に年齢を書きません。年齢などというものは、性別と同じようにその人の属性を表しているだけで、能力を表しているものではないと考えるからです。

次に兄弟間序列がある社会でどうして年齢による序列が生じるかというメカニズムなのですが、日本社会の場合は兄弟間の序列が学校の学年の序列に組み込まれて行ったと考えられます。六年生のお兄さんと一年生の弟というように、中学校以降のクラブ活動の先輩後輩関係というのはそれが組織化された現れ方だと思つたのです。兄弟の関係が学校の先輩後輩関係という形で固定化していったわけですね。一つした世代間序列を持つ社会というのは、企業に入ってもヒラ社員の間で入社年度に応じて序列ができます。企業はこれを無視して組織をつくると人間関係のストレスが大きくなると考えたのでしよう。能力主義だけで序列を決めて、年下の人に向かって敬語を使わなければいけないというような場面が生じると、心理的な負担がものすごく大きくなりますから組織として非常にコストがかかる。そういうことを避けるために、年功序列の組織ができていったわけです。こつこつ社会では官僚制のような階段型の組織が非常に機能的に作用します。

中国にも世代間序列があります。これは親と同居をする文化の社会には共通して見られる現象といえます。ですから年をとっているだけで権威がある社会的に認められるというのは東アジアで一般にみられる現象です。しかし年齢が二つ三つ違っただけでそこに序列が生まれるかという点、中国社会の中では日本や朝鮮半島ほど強い形では現れません。

その代わりに、中国にはコネのネットワークというのがあります。年齢に基づく上下関係は日本ほど強くない代わりに、横に連なっていくようなネットワークがある。学縁、地縁などがかつての同僚だとか、「病友」などという言葉が中国語にあつて、これはかつて同室だった入院患者のことをいいます。これも非常に重要なネットワークなわけです。中国の会社でよく社員による横流しの犯罪が起きますが、血縁原理のところでお話したように組織に対して忠誠心を持っていない以上、外に自分の信用しているネットワークがあればそちらに横流しをするというのは彼らにとっては非常に合理的な行動なわけです。しかしこれは国营企業のような大きな官僚組織は機能しません。

したがって逆に言うと、中国人にとって一番居心地のいい組織というのは、親戚家族で固めた組織です。中国で家族ほど信用できるものはないわけですから、この結合は非常に強固なものになる。それが台湾に沢山ある家族経営の中小企業です。台湾の中小企業というのは、経営は奥さんがやっている場合が非常に多いんですね。家族の中でも一番信頼できる人に経営を任せているわけです。要するに、企業一家というのが日本のパターンだとしたら、中国の場合には一家企業をつくれればいいわけです。

朝鮮半島は一応兄弟間序列があるので、どちらかというと二つの間の序列がしやすい、官僚制を作りやすいような社会にはなりません。ただ、血縁原理は優先されますから、日本ほど企業に対する凝集力は強くありません。そういう意味では中国と日本の中間的な形態と云っていいでしょう。

以上見てきたように、東アジアと一言に言っても家族のパターンは結構いろいろ違っています。そしてその家族のパターンを見ていくと、その社会がどういふふうに編成されているかということが分かってきたのだと思います。もちろん近代化、都市化の進展によつてこつこつした家族構造の特徴も薄まる方向にあるのは確かです。例えば現在日本の民法では、財産は配偶者の他は女子も含めた子ども間で均分に相続するようになっていきます。また年功序列の組織も、徐々に変わっていくかもしれません。その意味ではここで述べたことは、決して「不変の構造」ではなく、歴史のある局面に現れた特徴にすぎません。しかし、伝統的な家族の慣行はいわばその社会の基底的な規範として人々の行動に影響を及ぼして、その変化は政治・経済の変化に比べてはるかに緩慢なものです。たとえば学校の先輩・後輩関係がなくならない限り、年功序列の意識は私たちの間に残り続けるでしょう。そして家族はそうした社会組織の原点を提供しているのです。



「人権教育に関する地域会議」グループワークの様子

アジアの多くの地域で近代化がすすむにつれ、人権を巡る状況も徐々に向上してはいるが、伝統的価値観と深く絡み合い一朝一夕には解決されない問題も多い。また、開発やグローバリズムの進展に伴って新たな人権侵害も生じている。こうした状況の改善するために、アジアでは様々な組織が互いに連携を図りながら活動している。1997年度、アジアセンターが助成した事業の中から、アジア地域における人権状況の改善に取り組む2事業を紹介する。一つはヒューライツ大阪による「人権教育に関する地域会議」ワークショップ、もう一つは明治学院大学国際平和研究所による「アジア太平洋における人間安全保障」シンポジウムである。

## アジアの文化と人権教育

金 東勲・キム・ドンフン（ヒューライツ大阪）

### 人権の普遍性とアジア

一九九三年にウィーンで開催された第二回世界人権会議の過程、およびその後において、人権の普遍性 とりわけアジア諸国における をめぐる議論が高まっている。人権とは、人びとが人間らしい生活を営むために必要かつ不可欠の権利」であるとすれば、それは時代と場所を超えてすべての人びとが享有する普遍的な概念であることは明らかである。

にもかかわらずその普遍性をめぐって議論が続いているのは、概念もしくは観念的には普遍的であっても、その具体的な保障または保護ということになると、その個人が在住する国家と社会の政治・経済文化と不可分の関係にあることがその理由の一つである。つまり、言論・表現の自由などいわゆる自由権的基

本権の保障は、政治的民主主義と市民社会の発展によつてはじめて可能になるのであり、社会保障・教育の権利など社会権的

基本権は、ある程度の経済発展と財政的条件が整って初めて実現可能だということである。さらにまた、人権の保障と享有は、文化や宗教などその社会の伝統と価値によつても大きく左右される。いしかえると、概念的には普遍的な人権でも、その具体的保障は政治・経済・文化的多様性と切り離しては考えられないということだ。

人権の普遍性をめぐる議論が絶えないもう一つの理由は、人権という概念が歴史やイデオロギーと深く関わっているためである。市民革命の過程で自由権

基本権を確立した欧米諸国は、アジア・アフリカに対する植民地支配の過程で干渉と支配の口実として「文明」と「人道」という概念を使った。今日欧米諸国が主張する、人権の普遍性」はこうした歴史と重なり合っているため、アジア諸国はこれに対して「人権の多様性」と「アジアの人権」を主張して抵抗している。マレーシアのマハティール首相が、世界人権宣言はヨーロッパ諸国の考えに基づいて採択されたものであるとしてその普遍性を否定しようとするのも、前述のような歴史に基因するといえる。

したがって、アジアの人権を考

### 文化と人権

文化とは、個人集団とりわけ言語・宗教または伝統と習慣を同じくするエスニック集団もしくは民族が、長年に亘つてくり返してきた日常生活と努力によつて創造され維持されるものである。そのために、ある個人集団を他の集団と区分し民族的または宗教的アイデンティティを維持するものであり、その集団固有の価値として尊重されるべきものであることはいうまでもない。

しかし、人権の視点から考えると、文化をすべてであるがままに肯定し尊重すべきであるとは

必ずしも言えない。まず、文化はほとんどの場合、社会または民族内部の支配集団や多数派の意志と生活によつて形成され、被支配者または社会的弱者は文化形成過程から排除されるばかりか、文化の共有をも拒まれる。たとえば、東アジアの儒教文化は、男性中心の考え方や支配者への服従を支え、女性に社会参加や教育の機会を与えないことを正当化してきた。ヒンズー教の文化に基因するカースト制度も、インドの憲法がこれを禁止してから半世紀がすぎた今日においても維持されており、またイスラム社会における女性の地位の低さ、たとえば一夫多妻制や社会参加の否定も、イスラム固有の文化であると説明される。あるいは、仏教文化も日本の戒名制度に見られるように社会的身分による差別を公然と認めてきた。

もつとも、人権侵害と差別を正当化する役割をしてきたアジアの伝統と文化は、多くの場合には正されたか否正されつつあることも確かである。そして、アジア文化には、前述のような否



ニューデリーの街角の女性たち

定的側面だけでなく、家族の絆と地域社会もしくは共同体の利益を大事にする価値観のように、欧米の個人優先主義に比べてより人間的で、人権の確立にあって積極的側面も多い。たとえば、年長者を尊敬し親子関係や友人関係を大事にする儒教的文化と伝統は、より暖かい人間関係を支えてきており、高齢者や子どもの人権尊重の伸長を図るうえで重要な基礎になる。また、歴史的には差別を合理化し正当化する誤りを犯した仏教も、その根本的思想は寛容と

平等であり、人権の普遍性を実現するために積極的役割を果たしつるとも言える。このようにアジアの文化、特に宗教は歴史的实践の過程においては否定的役割を果たしたことも否めないが、人権を擁護し差別を戒める思想や内容も多い。これから人権と文化を両立させるための研究と教育が必要である。

### 人権教育の担い手

国連は一九九五年から二〇〇四年までの十年間を、国連人権教育十年」と定め、加盟国に対して、国内行動プログラムを策定しその具体的実施のために必要な措置をとるよう求めている。この「人権教育十年」の理念もしくは目標は、人権教育による「普遍的な人権文化」の創造と設定され、あるべき人権教育の内容と形態もしくは方法と対象について詳細にふれている。ヒューライツ大阪(財)アジア・太平洋人権情報センター)は、国際交流基金アジアセンターからの助成を得て、アジアの人権専門家、教育者そして国内人権機関と共に、「アジアの文化的価値と人権」をテーマに、大阪とバンコクにおいてワークショップを開催し議論を進めてきた。これらのワークショップと他のアジア人権会議における報告と議論にみる人権教育の問題点もしくは課題をかいまんで紹介することにする。

アジア諸国の人権教育は、国内の政治・経済的事情によってその内容と方法などが異なる。たとえば、フィリピン、インド、インドネシアでは、国内人権委員会が人権の推進役を果たし、教材開発やカリキュラム作り、さらには警察と軍隊といった国家権力機関に対する人権教育を行っている。そして、国内人権問題で国際的に批判され続けている中国でも、司法手続きとりわけ刑事手続きにおける人権侵害を防ぐために、裁判官、検事

そして弁護士に対する人権教育を武漢大学が計画的に行っているといわれる。さらにまた、香港大学の法学部も国内人権法コースを設けて、国際人権法の専門家を養成する計画を具体化しはじめている。カンボジア、モンゴル、スリランカなどの国でも、政治制度による制約はありながらも人権教育の努力は始まっている。

しかし、人権教育の中心的な担い手は学校教育であり、教員に対する人権教育、カリキュラムの改変、教材の開発が最も重要な課題である。アジア諸国の場合は特に、人権を反政府概念とみなす考えが強いため、人権教育を担うべき教員が消極的な姿勢になりがちである。そのため、政府の主導的取り組みが人権教育の推進にとって重要であるとされる声が高い。つまり、人権教育を学校教育の中で正規の

カリキュラムとして推進するには、民主主義と市民社会の発展が必要である。ところが、民主主義の発展には人権教育による市民の人権意識の確立が欠かせない。つまり人権教育と民主主義は表裏一体の関係にあるということだ。

また、人権教育は、文化の形成と享有から排除され差別されてきた女性、マイノリティ、先住民など、被抑圧者の人権状況を内容とし、その是正を志向するものでなければならぬことは、「人権教育十年」の行動計画にも謳われており、アジア諸国で人権教育に関わる人びとの共通認識でもある。

一九九七年九月二十三日から二十五日までの三日間、タイのバンコクでヒューライツ大阪が開催した人権教育に関する地域会議には、アジア十カ国から三十七人の専門家と教育者が参加した。そしてアジア地域の人権教育について各国の経験と問題を共有するとともに、問題の克服とあるべき人権教育について報告と討議が行われた。このワークショップが達成した主な成果を紹介して本稿を閉じることにする。

まず、学校教育における人権教育に焦点を合わせて、人権教育を支えるために望ましい地域プログラムについて意見を交換した結果、今後、小地域レベルでの経験をより密接に検証する必要があると合意し、一九九八年に予定される三つの小地域会議と一つの地域会議を支持・協力することに合意した。

そしてつぎに、会議に参加できなかったアジア諸国などの人びとも、会議の参加者が持ち寄った数多くの冊子や書籍を提示するために、ヒューライツ大阪がアジアの人権教育に関する資料集を出版することになった。さらにまた、ヒューライツ大阪は設立以来アジアの人権NGOや国内人権機関と協力関係を維持してきたが、本ワークショップで初めて協働作業を行うことによつて今後連携を強化させることが可能になり、九八年にインドネシアとインドで開催される東南アジアと南アジアの小地域会議にも全面的に協力することを約束した。さうそく五月一四日、一七日、インドネシアのジャカルタで、インドネシアの人権委員会との共催で開催されることになっている。

最後に、ヒューライツ大阪は、ヒューライツが支えている、国際教育と価値の教育に関するアジア太平洋ネットワークとの連携を維持し、当ネットワークが進めている学校教育における人権教育活動の強化にも協力できることになった。

# アジア太平洋地域におけるヒューマン・セキュリティ グローバル化のもとの開発と安全の評価基準

武者小路 公秀 (明治学院大学教授)

人間はさまざまな不安のなかで生きているだけに、「安全」(セキュリティ)を大切にしてきた。西欧近代社会では、とくに市民の安全を守る制度である国家が、軍事安全保障を担当したので、軍事力で保障するものは市民という人間の「安全」なのであった。そういう広い「安全」の考え方を前提にして、最近、「人間安全保障」(ヒューマン・セキュリティ)という言葉が国連で提唱され、日本でも使われている。この考え方は、軍事的な不安のほか非軍事的な不安材料への対策を含めて、人間(個人でも集団でも)が安心して生活できる条件づくりを意味している。

このような新しい概念が登場してきたのは、ある意味で、環境問題の関連で「持続的開発」というキーワードが出てきたのと大変似通った事情がある。それまで工業開発を進めさえすればよいというのが常識になっていたところに、「開発」を無制限に進めることで、環境が破壊されて人間の生存が不可能になつては元も子もないので開発は持続す

ることが不可欠だとして、環境の大切さを強調する熟語として登場し、今日では一つの慣用語になつている。これとおなじように「人間安全保障」も、国家の安全を保障するというのは大切だが、そのことで人々に不安が生じたら、何のための安全保障かわからないということ、人間を中心にして安全の問題を考へることを強調する。「持続可能な開発」が開発をどのような形で進めるのが望ましいかを計る物差しであるのと同じく、「人間安全保障」という概念は、軍事安全保障、国家安全保障、経済・金融政策などを、人間の立場から評価をするためにつくられた評価概念である。

## 国連の反省の中から登場

「人間安全保障」という言葉は、一九九三年にUNDP(国連開発プログラム)の「人間開発報告」のなかで国際舞台上で登場したキーワードである。この報告書は、コペンハーゲンで行なわれた社会開発サミットの開催にあわせて

「社会開発」を取り上げ、その評価の物差しとして、人間安全保障」を提唱したわけである。その狙いは、まず、「援助疲れ」を起こしている米国はじめ先進工業国が開発協力を積極的になるように、開発途上諸国における貧困が先進国における麻薬、人身売買、「不法」移住、テロなど人間安全保障の諸問題の原因であるから開発協力を安全保障政策として真剣に取り上げるようにと、説得しようという意図があった。

金融危機に直面する今日のアジア太平洋地域で、それよりも大切な狙いは、冷戦後の世界経済のグローバル化の中で、IMF(国際通貨基金)、世界銀行、国連のなかのいわゆる「ブレトンウッズ機構」が、人間の安全を脅かしていることへの批判である。グローバル経済の大競争を促進して劣悪な産業や行政官庁を振り落とす世界各国の経済自由化と規制廃止、とくに開発途上諸国経済の構造調整と指導に力を入れることで、IMFなどが対象諸国の貧困、失業、社会不安

に拍車をかけているという問題がある。いくら国家レベルの経済開発が進んでも、大企業・多国籍企業の大競争から排除された社会層や個人の生活不安が高ければ、人間安全保障上大いに問題になる。そのことを国連が加盟諸国に確認してもらつたために開かれたのが社会開発サミットであった。

従つて、「人間安全保障」という言葉は、安保理など国連の国際安全保障政策をたてているところで正式に採用されたものではない。しかし、昨年末、明治学院大学国際平和研究所で、国際交流基金アジアセンターの助成を得て開かれたアジア太平洋地域における人間安全保障」についてのシンポジウムの開会の基調発言において国連政治局アジア太平洋地域担当のアレクサンドル・イリチエフ氏が指摘しているように、「ヨフィ・アナン国連事務総長は国連改革構想などに関する発言のなかで、予防外交や平和構築の重要性を強調し、その際に紛争の脅威にさらされている社会の安全確保を開発政策と

安保政策の共通の中心課題としている。「人間安全保障」という表現は使われていないが、人間の安全保障の重視という考え方は、国連改革の一つの柱になつている。このことは、安保理を中心にして冷戦後の国連が推進してきた平和維持、平和強制路線の行き詰まりを打開する上で、きわめて大事な動きであるといわなければならない。

「人間安全保障」論は、グローバル経済が引き起こす人間の不安状況に国連が十分対応できないことへの反省から生まれたもので、まだ十分国連の国際安全保障政策のなかで活かされていない。しかし、この評価基準のおかげで、今日、世界の人々の不安の二大材料である軍事紛争と経済金融危機の密接な関係が見えてくる。グローバル化路線を選ぶ先進工業諸国のタ力派勢力は、今日、米国を単一の覇権国とし、これに西欧と日本が協力するグローバルな覇権体制を維持・強化するために、経済的には自由貿易主義・自由放任主義を採用し、軍事面では開発途上地



域での平和維持・平和強制、覇権に挑戦しそうな諸国の抑止、テロ対策・危機管理などの積極介入主義をとらうとしている。このようなタカ派路線は、人間の安全が脅かされ犠牲性が出て、それは必要だ、という人間軽視の強引な路線である。これに対して、国連やNGOのハト派勢力は、真正面から異議を申し立て、「人間安全保障」をグローバルな経済・軍事諸問題の評価基準として提唱しているのである。その異議は、経済面では少

しずつ加盟諸国の間でも受け入れられている。その証拠には、環境サミット（一九九二年）、世界人権会議（一九九三年）、国際人口会議（一九九四年）、社会開発サミット（一九九五年）、世界女性会議（一九九五年）、人間居住会議（一九九六年）の各行動計画は、紛争時の問題や紛争予防、とくに安全を脅かされる人々の問題、地球的諸課題との関係などで、人間安全保障という言葉を使わないまでも、事実上加盟諸国の合意をまとめている。その反面、安保理の審議の基準として「人間安全保障」はまだ採用されていない。しかし、イラク問題などで、米国の強引な覇権行動への批判勢力が次第に安保理内で出現しているだけに、グローバル経済の阻害勢力を軍事力の威嚇と行使で除去しようとする介入的国際安全保障政策への反対論を支える、「人間安全保障」の考え方は早晩国際社会に受け入れられるに違いない。

### アジアからの報告

先述の明治学院大学国際平和研究所の国際シンポジウムは、平和研究者のほかに、上記の国連諸会議の行動計画の実施について日本政府にロビー活動を行っているNGOネットワークおよび沖縄・フィリピン・インド・アフガニスタンでそれぞれの社会における各種の不安要因と取り組んでいる運動家・研究者が集まっ

て、とくにアジアにおける人間安全保障を脅かす不安要因をい

いと取り上げて話し合った。沖縄については、米軍基地周辺の女性が経験しているジェンダーセクハラ問題の深刻さと安全保障の確立のための市民の活動状況のほかに、米兵と沖縄女性の間に生まれた婚外子の父親による認知が、（独米間の地位協定と違って）日米間の地位協定では保障されていないという問題などが報告された。フィリピンでは、米軍基地周辺のセックス産業で働かされていた軍事性奴隷が、基地撤去後には日本やオーストラリア男性客のセックス観光の餌食になっていることが報告され、その「ヒューマン・セキユリティー」をどう保障できるかが議論された。またミンダナオにおけるイスラム系住民の不安、とくに女性たちの複合差別の問題が報告され、あわせて、同地域に周辺有事に備える米軍の駐留計画がもたらがうており、新しい不安材料となっていることが報告、議論された。南アジアからは、インドのボパール工場爆発事件がもたらした環境汚染による地域民衆の安全の問題、アフガニスタンの先住民民族「ザフミ族」の文化破壊によるアイデンティティ喪失の問題、スリランカにおける民族紛争に巻き込まれる民衆の安全喪失の問題などが報告され、議論された。以上のよう

に多様な人間安全保障問題をアジア太平洋地域の人々は抱えている。しかし、その多様性の背後には、経済・軍事のグローバル化の影響で起る各種の不安が潜んでいることが確認された。そこで、以上の諸問題の討議の結果を踏まえた宣言では次のようにアジア太平洋地域の人間安全保障の問題を要約している。「グローバル化する金融資本投機経済と軍備拡張の相乗効果で、多国籍企業や国家間の大競争は激化し、アジアの多くの地域に紛争と不安をもたらしている。グローバル化する軍事化はとりわけ覇権国の基地周辺に住む人々の安全を脅かし、またグローバル経済は、その下積みとなり或いは切り捨てられる低所得層に深刻な脅威をもたらしている。われわれは、グローバル化が大きな危険をはらむ人為的なイデオロギーの結果であると考える。このイデオロギーは、経済におけるネオリベリズムを基礎に規制撤廃と自由競争推進を主張し、政治的・軍事的には、覇権国主導の介入を支えるものである。両面が合わさって、それは人民の大部分にとり、生活の様々な領域で不安を助長するものである。」

このような国際政治経済状況のもとで、「人間安全保障」は、国際政治の権力闘争と国際経済の大競争との相乗作用のエクレーションを抑えるために、国家や国連が組み立てる軍事・経済面の諸政策を、人間の安全中心に評価する基準として機能する。そういう現実の政治経済的な権力闘争のなかでの政策論的な概念なのである。タカ派のグローバル化路線にしたがえば、国家間の勢力均衡と企業間の大競争が人類の進歩に貢献するので、その結果でてくる人間諸集団の不安など瑣末な問題にすぎないということになる。「人間安全保障」は、この断定への反論でもある。事実、人間諸集団の不安を無視することで起る社会摩擦、国家への反抗、国際紛争の軍事化などは、諸国家や国連にとつてかなりの「コスト」となるので、人間安全保障の問題は、現実主義の立場からも無視できないはずである。明治学院大学でのシンポジウムの直後に、アジア金融危機が発生したが、その結果IMF指導の経済自由化で、破産や失業などが地域の人々の安全を脅かし始めている。

# インドネシア注目の 新人作家に聞く

解説：インタビュ／稲見 和己（国際交流基金ジャカルタ日本文化センター）

今インドネシアの文化人の間で評判になっている、サマンという小説がある。これは、ライラ、ニコヨークに立ち寄らず」という小説の未完原稿であるが、今年三月にジャカルタ芸術評議会が主催した九八年小説コンクールで審査員の満場一致で一位を獲得し、長らく低迷していたインドネシア文学界に大きな衝撃を与えた。

全国紙コンパスは文化面すべてを使ってこの作品を扱い、コンクールに提出された原稿のコピーは、経済危機で紙代、コピー代が急騰しているにもかかわらず、瞬く間に学生やジャーナリスト、文化人に広まった。シアの文学者たちは声をそろえて絶賛し、唯一例外だったのはノーベル文学賞候補にもなった作家プラムティアの、事実誤認が多いが作品の完成度は高い。読み続けることはできなかった。読み続けてはまた政治犯にされてしまう気がした」というコメントであった。さらに作者が弱冠二九才の女性で事実上の処女小説であることが判明すると、一時はゴーストライターがいるのではないかという疑いさえ囁かれた。この作品がインドネシア文学界に与えた影響はそれほど大きかった。

タブーを超え、現実の問題を直視

作品は、独身のインドネシア女性が「ニコヨークのセントラルパークで恋人の既婚男性を待

つ場面から始まる。ここではインドネシア語の詩の美しさが前面に出される。場面は二人の出会いの場所である海上油田探掘所に移り、ここで起きた人身事故を有力なコネを持つ人物がもみ消したことに抗議する二人と元神父の闘争が描かれる。次の章では、サマンという名の元神父の過去が描かれるが、スマトラ島の田舎を舞台に、国内移民、貧困、人権、そして最近外国からも注目を集めるようになった活動家の誘拐事件といった、まさに今のインドネシアが抱える様々な社会問題を骨太な文章で提示していく。この後場面は再びニコヨークに戻り、ここでは現代インドネシア特に都市部の女性の心の動きが細やかに描かれている。これまでのインドネシア文学界には見られなかった、またはタブー視されていた社会問題、そしてポルノ小説のようなあからさまなものでもちろんないのだがセックス表現といった要素をあえて取り込み、かつ文章表現そのものの質が多くの文学者が絶賛するように非常に高いものとなっている。

ジャカルタ在住のフランス人研究者曰く、「この作品はこれまでインドネシアの文学者が絶えずエクスマユーズとして使ってきた、政府

による検閲という理由を打ち砕いてしまった。問題は検閲ではなく、文学者自身が現在の社会状況から遠ざかっていただけだということ。この作品は図らずも証明してくれた」



左からグナワン・モハマド、アディラ・スワロモ（ロンタール財団）アユ・ウタミ

作者は巻頭の謝辞で次のように述べている。「作家は自分の経験のみに寄りかかって創作を行うことはできない。なぜなら、個人の経験などは非常に限られたものにすぎないから。（中略）ウタン・カユ・ニコユニティの仲間たちの協力で感謝する。最初は彼らのためにだけに書き始めた物語である。」

ウタン・カユとは、ジャカルタの一地区の地名だが、演劇、音楽、映画などの発表の場である、テアトル・ウタン・カユや美術展を行う「ギヤラリー・ロンタール」、文化財保護文化振興を行う「ロンタール財団」、文化雑誌「カラム」といった組織が、比較的小さな敷地の中に集まっている。ジャカルタの新しい文化活動の中心地で、インドネシアの代表的知識人グナワン・モハマドが主宰している。作者のアユ・ウタミは、ジャーナリストとして、また雑誌「カラム」の編集者としてこの「ニコユニティ」に加わっている。話題の前進作家にインドネシアの文学界や文化事情について話を伺った。

インドネシアの作家は  
牢獄で大作を書く

未完のしかも処女小説で一躍文学界の寵児となった感がありますが、インドネシアの文学界についてどう見ていらっしゃいますか。  
アユ 本来はもっとと実力のある人物がいると思います。しかし、インドネシアでは文学作品

を書いて食べて行くことは非常に難しいので、特に男性は一家を支える必要がありますから、作家活動に専念することのできる人材が少なくなっているのだと思います。それにインドネシアには文学者に賞や助成を出したりする有力な機関がなく、作家を支える体制が弱いと思います。

すでに世に出ている作家では、私としてはプラムティアやウマル・カヤム、フディタルモ、N. H. デイニなどが優れていると思います。よく、インドネシアの作家は外国から牢獄で大作を書くと言われています。先に挙げた作家で言うと、プラムティアは牢獄で、人間の大地「シリズ」を、ウマル・カヤムは外国で「パラ・プリアイ」を書き上げています。N. H. デイニは主婦なので、比較的自由になる時間があり収入の心配をする必要がないといった条件を備えています。私もまだ未婚の女性として、自分以外の者のための収入を考えずに済んでいますし、雑誌「フォーラム」を辞めて「D&R」に移ってからは、作品を書く時間は十分にありました。

聞くところでは、マレーシアでは政府が詩集を買い上げる制度があるそうですね。インドネシアでも政府による出版物購入の事業はありますが、例えば教育文化省の購入資金の30%は大統領の長女の著作物を買ったために充てられているとも聞いています。総じて言えば、インドネシアには作家を作家として存在させるための支援が無いといえます。国内で好きな作家はやはり先に挙げられた人達ですか。

アユ それ以外にも、私は美しい詩が好きなので、サバルディシヨコタモノやスタルジ、スハディオサストロバ、ディオ、それにもちろんセマスタングナワン・モハマドといった詩人の作品をよく読みます。  
文学について言えば、インドネシアの文学批

評は、作品そのものの文章の美しさ、格調の高さ、書かれてある内容の密度といった点を批評するよりも、作品に書かれた内容を歴史、社会的背景を通じてのみ読み解き評価するといった傾向があります。例えばウマール・カラムの「プンプリヤイ」もそうですが、もっと違った批評のあり方があっても良いのと思っています。

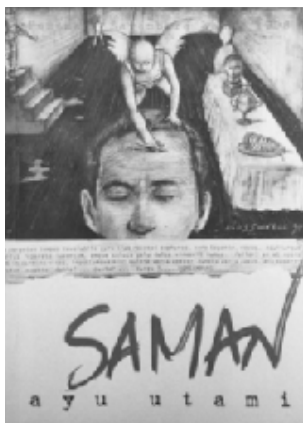
インドネシア以外のアジアの文学を読んだことはありますが。

アユ これもインドネシア文学界の問題と関連しますが、インドネシアではアジアの文学の翻訳作品があまり出版されていないのです。遠藤周作の作品を読んだことがあります。確か英語からインドネシア語への翻訳でした。

私は外国にあまり出たことがなく、アジアの国の言葉も知りませんし、英語もそれほど得意ではありません。遠藤周作以外にはタイの女性作家の短編集を読んだことがあります。名前を思い出せません。

これまでどんな国に行きましたが、アユ アメリカとイギリスに少しだけ。他のアジアの国には行ったことがありません。

欧米の文学ではどんな作家、作品が好きですか。



アユ・ウタミの小説「サマン」の表紙

アユ あまり知られていないと思いますが、ジャネット・ウィンターソンという女性作家が好きです。とてもイマジネーションに溢れていて、ストーリーもあちこちに飛び回って、とても魅力的な作風を持っていると思います。他には、サルマン・ルシディーやインドの作家でアルムティロイなどが好きです。

やはり欧米、少なくとも英語で直接小説を書ける国とそうでない国とでは最初から負っているハンディがありにも違つように思います。私は英語で小説を書くことと思っても書けませんから。

「ジャーナリストとしての制約に  
フラストレーションを感じていた」

以前、ジャカルタ日本文化センターにも取材に来られたことがありましたね。ジャーナリストから作家に転身した理由は何ですか。

アユ 今回の作品は、多くの読者を想定せず、ウタン・カユの友人たちに読んでもらうために書いたんです。というのもインドネシアでは文学作品が多くの一般読者を獲得することは難しいのですから。

これまでジャーナリストとしていくつかの雑誌を遍歴してきましたが、事実に基づき、関係各方面の、特に取材対象者の気分を書きずらに記事を書くことに多少フラストレーションを感じるようになってきて、自由に書ける小説を書いてみようという気になったのです。もちろん小説にもたくさん制約はありますが。

今はジャーナリズムの仕事はほとんどしていません。収入を保証してくれるのは雑誌編集者としての部分で、これがあるので時間的ゆとりが生まれ、作家活動もできるようになります。でも正直なところ、この作品が有名になってからジャカルタのほとんどの新

聞雑誌から取材申し込みを受けていて、民放テレビ局からも出演依頼が来て、とても嬉しいこと。今回の出版は四月の下旬に第一版三五〇〇部が出ましたが、二週間たった現在です。第二版が出たのです。

インドネシアでは小説の初版はだいたい二〇〇〇部、多くても三〇〇〇部と聞いています。ですから、初版三五〇〇部だけでも多いのに、すでに第二版というのは驚異的でもありますね。第二版は何部ですか。

アユ 再販の話が出たときに私は熱を出して、事務所の友人たちが勝手にオーケーしてしまつたので、何部になつたか聞いていません。

それはおおらかですね。ところで、日本とインドネシアの関係、さらにはアジア域内の交流について、どのような意見をお持ちですか。アユ そうですね、先程申し上げたようにインドネシアには他のアジアの文学の翻訳が少ないので、例えばアジア各国の翻訳出版交流を日本の協力で進められたらいいなと思います。

インドネシアの文化状況については。

アユ 雑多な文化人が老若男女を問わず集えるウタン・カユのような場所がもっと増えればよいと思います。タマン・インスタイルマルズキは文化人の集う中心地ではありますが、シニラの文化人に占拠されてしまつた感があります。今あそこで行なわれる活動で、私たちの世代の声を活かされている物は無いのではないのでしょうか。それに大所帯になりすぎてしまつたような気もします。小さなグループの集える場所というと、以前はクロンチョン（インドネシアのポピュラー音楽）歌手のデウ・イユルの自宅を開放して皆が集うオランチヨルという場所がありました。本人が引越してからだんだんと寂れてしまいました。

では、第二、第三のウタン・カユを作る条件のようなものはあるのでしょうか。

アユ ウタン・カユはやはりマンズグン・グナフン・モハムドの存在が大きいと思います。誰もが勝手に来て、勝手にことをしゃべれる雰囲気みたいなものは、彼の存在があつて初めて生まれてきますし、実際にこの運営は、外部からの援助ももちろんありますが、彼が私財をなげうっている面もあるんです。

詩人のインドラも、ヘンケルシアターでは多くの若者を呼び集めています。彼のところはどちらかというと一緒に寝起きを共にするような感じで、家族的ではあつてもシステムとしては機能していないように思います。ウタン・カユには例えば会計担当がいて、ここに集まる人たちも基本的には毎日自宅から通つ形をとっています。

ジャヤカルタのプランバナンに近いにも確か日本人の奥さんを持つ芸術家の人がいて、文化人の集うサロンのような場所になっていると聞いています。ともかく、ウタン・カユのような場所がもっとできれば、文化芸術活動はもっと盛んになるのではないのでしょうか。

文化的雰囲気と仲間たちとのつながりの中で、個人の力も高められるということですね。病み上がりで体調も十分でない何何していますが、本日は有り難うございました。

アユ・ウタミ略歴

一九六八年ポータル生まれ、ジャカルタ育ち。インドネシア大学文学部ロシア学科卒業。一九九一年ブリタニア紙日曜版に連載コラム執筆。ジャーナリストとして「マトラ」、「フォーラム」(インドネシア)、「D&R」といった雑誌を遍歴。一九九四年の報道週刊誌「テボ」(「エイトール」ドゥツティック)三誌の発禁処分の際に、発禁処分反対グループの一員として「独立ジャーナリストアライアンス」設立に加わるが、これがもとで一年後に「フォーラム」(インドネシア)を免職となる。現在は文化雑誌「カラム」編集者。

# 経済危機で伝染病、ストレス病も

稲見 和己 (国際交流基金ジャカルタ日本文化センター)



状況悪化に備えて買いだめに走る市民たち

深刻な経済危機が伝えられているインドネシアでは、最近明るいコースというのはあまり聞かない。インドネシア語で通貨危機(Monetary Crisis)をクリシス・モネートル(Krisis Moneter)というが、これを縮めたクリスモンという、このことなかわいらしい響きを持った単語があちこちで囁かれる。流行語大賞があったら間違いなく一位になっているだろう。

そんなジャカルタで、経済危機が直接・間接的な原因となって引き起こされている現象がいろいろとある。そのうちの一つは病気の流行である。失業や物価上昇によってその日の食事も困る人々が増えているが、この四月頃から Dengue 出血性熱が流行し、小さな子供たちを中心にたくさん犠牲者が出ている。テレビではいくつもの病院が患者であふれている様子が映し出され、厚生大臣の注意喚起の呼びかけが流される。俳優としてテレビドラマで大ヒットを飛ばし、去年の総選挙で与党 Golkar 選出の国会議員にもなった ラノ・カ

ルノ氏も、共演者と一緒に Dengue 予防のテレビコマーシャルに出演している。しかし、この予防というのが水周りの排水に注意して、水瓶のふたをし、水がたまりそうなきき缶、タイヤなどのゴミはきちんと埋めることというもので、要は蚊の繁殖を抑えるためのものである。Dengue 熱は蚊が媒介するので蚊の発生を抑えることは大切ではあるが、雨樋、空き地、排水溝など、ちよつと雨が降れば水がたまる場所はいくらでもある中で、コマーシャルの効果はどの程度のものなだろうか。熱帯に暮らして蚊に刺されないようにするということが、どだい無理という気がしてならない。身近なインドネシア人の友達からも、「現在入院している」、「子供が死んでしまった」、「血液不足で輸血用の血を探している」といった話をよく聞くようになった。Dengue 熱だけでなく、腸チフスや結膜炎も流行の兆しを見せている。こういった病気の蔓延は、栄養状態の悪化に起因しているところが大きいだろう。

また、経済危機が原因と思われる巷で取り沙汰されているのが、ストレスによる鬱病である。これは主に事業に失敗した実業家がかかるらしく、大都市の精神科医やパラ・イマルといわれる呪術師の元を訪れる人が増えているらしい。呪術師は未来を予想したり精霊を使役するものが多いのだが、新聞にも紹介されていた有名な呪術師は、ジャカルタ近郊の豪邸に住み日曜は趣味のジャットスキーに余念がないという。その時のコメントは、「既に患者がいっぱいで、新規受付はどんな大金を積まれても断る。私には申込人の資産が分かるから、その人には絶対に払えない金額を言うて追い払うことになっている」と、なにやら偉そうなものであった。インドネシアにもダイヤル Q2 のような有料電話サービスがあるので、最近はこの分野でも事業や人生相談に関するサービスが増えてきたようだ。

経済危機のなか、新たな顧客を確実に増やしている事業もある。ネスミ講である。先日、米国に始まったと言われるあるネスミ講の会員に会った。にこやかに自信に満ちあふれた彼女によれば、非常に優れた商品を廉価かつ会員制で販売している。これはビジネスチャンスと分かつ合うシステムで、何ら違法なものではないし、経済的に困窮している人たちでも仲間を集めれば収入の道が開ける画期的なシステムだ、という。このグループが扱っている商品は肝油などの栄養剤や中国茶を原料とする万病に効く(と)という(お茶であるが、おもしろいことにその商品のパッケージには英語で「かりと、ダイエット食品」と書かれていた。本来はやせたい人のための商品が、クリスモン状態のインドネシアでは滋養強壮、栄養補給の商品に変わってしまった。所変われば品変わるといふのを痛感した。ジャカルタ在住の日本人コミュニティーに紹介してほしいと言われたが、丁寧に断り申しあげた。

経済危機だ、金がない、仕事がないと言われていて、確かに明日の食事に事欠く人々が間違いなく増えつつある。このまま物価が上昇して物価上昇率が100%を超えると、全人口二億人の六割が貧困線以下の生活水準となるとという話も聞いた。しかし一方で、週末のカフェバー、デイスは若者で溢れかえり、ゴルフ場も相変わらず賑わっている。やはりこの大きすぎる所得格差のつけは、いつかどこかで、誰かが支払わなければならないのであろう。

# Information

インフォメーション

アジアセンター1998年度事業



インド現代美術展参考作品

## 1 公演事業

南インド古典音楽コンサート  
若手演奏家、S・シヤーンク  
のグループを招聘し、南インド  
に古くから伝わる竹の横笛フ  
ルートを中心に、太鼓、口琴、  
弦楽器による古典音楽の演奏  
会を行う。楽器の奏法・音楽の  
構造などについてレクチャー・デモンスト  
レーションも併せて行う。

東京：国際交流フォーラム(赤坂)  
98年10月9日(金)～11日(日)  
神戸：シーベックホール 10月14日(水)  
福岡：アクロス福岡 10月17日(土)

「リア」海外公演  
アジアセンター制作による六カ国参加演  
劇公演「リア」(九七年九月に東京で初  
演)を、香港、シンガポール、ジャカルタ、  
パースにて上演。  
99年1月22日～2月18日

## 2 展示事業

インド現代美術展「フライ  
ベイト・ミソロジー」(仮)  
インドを代表する現代美術家  
八人の絵画・彫刻・インスタレ  
ーションなど約三十点を展示し、  
インド現代美術の最新の動向  
を紹介する。

会場：国際交流フォーラム(赤坂)  
98年10月17日(土)～12月6日(日)(予定)

「アジア漫画展」  
国連エヌカップ設立五十周年記念

「アジア漫画展」  
国連インフォメーションサービス(UNIS)  
では、昨年エヌカップ設立五十周年を  
記念してアジアのプロの漫画家を対象と  
して「アジアの社会・経済開発」について  
コンペティションを実施したところ、十三  
カ国より二百八十余点の応募があった。  
これらの中から優れた作品百点を日本  
で紹介する。

## 3 映像事業

アジア映画監督シリーズ  
「金綺泳 キムギヨ」監督追悼  
上映  
去る二月に急逝した金綺泳監  
督を追悼する緊急上映。

上映作品「破戒」「肉体の約束」  
「異魚島」

講演：四方田犬彦、佐藤忠男、朴昭妍  
会場：国際交流フォーラム(赤坂)  
98年6月13日(土)、14日(日)

アジア映画シリーズ  
「インド映画祭一九九八」インド独立五十  
周年記念  
前半にヒンディー語娯楽映画の傑作を七

東京：アート・ミュージアムギンザ  
98年7月27日(月)～8月12日(水)  
福岡市、水戸市、愛知県、呉市、小平市、徳  
島市、知立市等にも巡回予定。

本を一挙上映。後半はインド映画史に  
巨大な足跡を残したラジカプール監  
督と若手ナンバーワン、マラトナム監督  
の作品六本を上映する。また、ゲスト四  
名が来日予定。

会場：国際交流フォーラム(赤坂)  
98年7月29日(水)～8月16日(日)  
以後、各地巡回予定  
上映団体を募集中。お問い合わせは(財)  
国際文化交流推進協会映画担当(〇三三五  
五六一四四二)まで

中国映画特集  
上映作品未定  
会場：国際交流フォーラム(赤坂)  
98年12月10日(木)～20日(日)(予定)  
以後、各地巡回予定

## 4 講演会

開高健記念アジア作家講演  
会シリーズ8  
アジアより作家を二名招へい  
し、東京と地方都市で講演会  
および日本の文学者との交流  
会を実施する。日程など未定。

### アジア理解講座

アジアの文化・社会芸術に関する連続講  
座。「東南アジア実践仏教の姿」「インド  
ネシアの現在を読む」「東アジアの舞台  
芸術―伝統と現代」「インドネシア文学  
を味わう」他を予定。

会場：アジアセンターレクチャー室  
第一期 98年5月6日～7月14日  
第二期 98年9月～12月  
第三期 99年1月～3月  
各講座週一回・全十回 19:00～20:30  
(アジアセンター事業についてのお問い合わせ  
は〇三三五五六二二八九二まで)

## 国際交流基金 寄付金制度について

国際交流基金では、国際  
文化交流の一層の発展・普  
及のため、皆様よりの支  
援をお願いしております。  
中でも、年会費として一  
額のご寄付をお願いする  
会員になっていただきます  
と、定期刊行物の送付や  
図書館のご利用、催しへの

ご案内など、様々な特典がございます。  
今年一月より、これまでの「賛助  
会」(個人一〇二万円、団体一〇十万  
円)に加え、新しく、友の会(個人  
のみ、一般四千元、学生三千元)が発足  
しました。多くの皆様のご入会をお  
待ちしています。なお、当基金は特定  
公益増進法人に指定されており、ご  
寄付は税制上の優遇措置の対象とな  
ります。

お問い合わせは資金課(〇三三五六  
二二五一九)まで。

### 編集後記

読者アンケートに基づき、今  
号から誌面を二八ページに増や  
し、国際交流基金のアジア各地  
の事務所を通じて、現地の生き  
た文化情報をお届けすること  
になりました。教育、食生活、  
流行、テレビ、出版など、身近  
な話題を取り上げていきます。  
ご期待ください。

映画制作に対する情熱が、  
厳しい政治状況乗り越え  
る原動力になることもあれば、  
かつて自分を苦しめた国への共  
感を生むきっかけになること  
もある。民族の文化や歴史、そ  
して作り手の人生観が融合し、  
昇華してひとつの映画が生まれ  
る、そういう意味でも映画は  
「総合芸術」なのだ。あらため  
て認識させられました。

私たちに素晴らしい映画と  
忘れられない印象を残してく



国際交流基金アジアセンター  
The Japan Foundation Asia Center

アジアセンターニュース

第9号 1998年6月発行

発行：国際交流基金アジアセンター

東京都港区赤坂2-17-22 赤坂ツインタワー1F

電話 03-5562-3891 FAX 03-5562-3897

編集協力：(財)国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)

レイアウト：白谷敏夫・土屋絵理(ノマド)

印刷：創英

©国際交流基金

Asia Center News

The Japan Foundation Asia Center

Akasaka Twin Tower 1F, 2-17-22 Akasaka,

Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan

TEL: 03-5562-3891 FAX: 03-5562-3897

©The Japan Foundation

本誌記事の無断転用を禁じます。

本誌は非木材紙とベジタブルインキを使用しております。